

中洲の公園
中之島公園を
云ふ。

六月の秋云

夏も尙涼しか
りしとのこと

書舫

飾りたて、美
しき船。

◎時序

(夏)

○夏夜の遊歩

七百六十四

夏夜の遊歩

一味の涼を追ひ、中洲の公園に歩しぬ。月明水の如く天に流
れ、樹影山の如く地に布く、蓋し深夜の景なり。噴水池のあ
りし頃は、俗ながらも涼を送る。晝も尙六月の秋を覺わしか
ど、今は豊公の銅像を見るのみ、一朝に之を設け、一夕に之
を棄つ、何ぞ興廢の甚しき。歩を移して、東のかた浪花橋
畔に至りぬ。橋欄に倚りて見渡せば、幾十の書舫やうやく去
り盡し、一川の水、初めて流る、の感をなす。納涼臺の繁華
また尋ぬべくもあらず。瓢々として吾衣を吹く風、頓に都
門の熱を消し、又人間の煩塵を洗ひぬ。仰げば天澄み氣高く

岸樹玲瓏
江岸の樹木の
葉なごがびか
くするること

室内消暑

座敷の中で暑
さを覺ゆぬや
うにする事の
義。

白雨沛然

夕立がゴツさ
り降ること。

◎時序

(夏)

○室内消暑

七百六十五

室内消暑

白露すでに下り、岸樹玲瓏として清く、天地將に秋を成さん
とす。知らず、吾が書屋も新涼すでに簾に上り、燈火親しむ
べきの候をなすや、否やを。
天下の士、多く暑を避くるに、或は海、或は山を以てす。剩
さへ、千里酒を載せ、且つ妓を携ふるもあり。此の如くにし
て、果して炎暑を消し得る乎。吾は室の中央に坐し、古人の
文を把りて讀む。其決なるものは、白雨沛然として至るが如
く、また飛泉の九天より落つるが如し。其妙なるものは、忽
ちにして山、忽ちにして海、忽ちにして月、忽ちにして風、

◎時序

變幻云云
状態の變化速
かなるこころ
目さきのかは
るこころ

萬斛の涼
たくさんの涼
しみ

人烟稠密
人家の櫛比す
る云ふ

(夏) ○水都の二記

七百六十六

千態萬狀、變幻窮りなし。其麗なるものは、花の春風に綻ぶが如く、千紫萬紅、人の目を慰むるに異ならず。其瀟灑なるものは、疎梅の淺水に臨むが如く、幽篁の微雨に浴するが如し、一卷の名文、人をして恍然として、其境に逍遙せしむ。故に身は天地の爐に臥し、人間の熱に投ずるも、心には一點の俗なく、而も萬界の涼あり。吾れ何ぞ暑を、山と海とに避くることを要せんや。

水都の二記

我が大阪は、古來商業の地、人烟稠密、四時花月の勝に乏し。只水は市中到る處に在り。故に納涼を以て四時の

甲とす
第一とする。

天地も亦爐
此世は爐中と
同一とて暑
きこころを云ふ

炎威云云
暑氣極めて勢
つよきを云ふ

◎時序

其一 晝

甲とす。余、澱江に遊ぶこと二回、一は晝、一は夜、各記するに文を以てしぬ。

此日や炎暑烘くが如く、天地も亦爐なり。乃ち暑を澱水に洗はんとし、舟を中流に放つ、時に午下二點鐘の比なきに。江風吾が衣を吹き、涼なきに非ざるも、一天火雲を漲らし、炎威赫々として驕る。是に於て、余大に悟れる所あり。暑は天下到る處にあり。身を瀑布の下に致し、また氷壺の中に投ずるも、遂に之を避くるの地なかるべし。たゞ古人が所謂、心涼しくは身自ら涼しと云へるの句、以て消暑の法とすべき乎家に歸りて後、机を掃ひ香を焚き、書に對すること頃刻、

(夏) ○水都の二記

七百六十七

◎時序

人間の熱
此世のあつさ

神骨
心さ云ふ義。

客居云云

旅住居にて饗
應する物がな
い。

船を云云
船遊の用意を
するこゝ。

午熱
晝間の暑氣。

舷々云云
船の相集ふ形
容。

白を擧げ
杯を手にして
酒のむを云ふ

芳列
味よくうまさ
い。

◎時序

(夏) ○水都の二記

七百六十八

忽ち人間の熱を思はず、折しも白雨沛然一過、神骨うた、涼
しさを覺わさ。

其二 夜

人間の暑や、之れ山に避け、之を水に逃る、も、余既に其消
すべからざるを知れり。このごろ、郷友の浪華に來れるあり
客居物の供すべきなし。故に所謂水都の夜景を以て、天涯相
遇ふの歡を盡さんとし、酒と肴とを載せ、舟を澱江に泛ぶ。
蓋し余が意、郷友の舊情に酬いんとするに在りき。時方に薄
暮、垂柳淡煙をこむるも、斜日未だ落ちず、兩岸に列する紅
樓翠閣、珠簾深く低れて、銀鈎に上さず。然れども、舟を舩
するの客少なしとせず。既にして水雲漸く生じ、江風徐に

來り、稍午熱を忘る。此時に方りてや、一川皆舟、月華天に
満つるも、水に金波の影なく、只湧くものは絃歌のみ。而も
舷々相摩して鳴り、珠簾相觸れて聲あり。顧れば、兩岸十
里の樓臺、酒影緑に燈光紅なり。陸もなく、水もなく、豪華
至らざるは莫し。宜なる哉、人呼びて水都と謂ふや。郷友と
の景を觀、未だ嘗て一語をも發せず、た、白を擧げ、天を仰
ぎてありしが、忽ち口を開きて曰く、酒や美なり。君、吾に
饗するに、灘の芳列なるものを擇びしならん。景や繁華なり
君、吾に觀せしむるに、浪華の俗なるものを以てせる乎。吾
れ想ふに、何人ぞ雖も酒は芳列を愛し、景は乃ち俗なるを厭
はん。吾れ初めて此處に遊びしに、所謂水都の稱なるもの、

(夏) ○水都の二記

七百六十九

◎時序

観は云云
遊びは甚だ下
品なり。

天地の炎涼
此世の暑いさ
涼しきぞ。

櫻祠
櫻の宮を云ふ

(夏) ○水都の二記

七百七十

名は雅にして、観は大に俗なり。而も多くの人は、涼を追はんとして、却て熱に走るもの乎。將涼に托して、豪華を貪るもの乎。吾れ得て之を知らざるも、永く舟を此に停むるは、策の得たるものに非ず。君以て如何とするかと。余大に感じ語るに前遊を以てせしに、郷友曰く、旨ある哉、君の言や。天地の炎涼は、未だ必ずしも天地に存せず。炎や涼や、只一人の心に在るなりと。互に残樽を酌み、舟を上流の閑地に行る。一棹は一棹よりも幽に、古城の青松白堊、夜尙指すべし、遂に櫻祠に至りて船を棄てぬ。四顧寂寥として人なく、露叢に啼くの蟲、唧々として既に秋なりき。

◎時序

東雲の天
夜あけの空。

逍遙すれば
まきよへば
らくと散歩
すれば。

一寸の遠帆
遠方に見ゆる
帆かけ。

磯曲の曉色

磯家の夢覺むれば、東雲の天白みて漸う薄赤うなれるに、星の瞬きやんで、波間に残る漁火、螢よりも幽かに二つ三つ、靄を漏るれど、沖の小島はまだ夢なり。さらりと波寄する砂濱に逍遙すれば、微風松を度りて幽琴を奏で、疎鐘雲を出で、曉鴉を送る。見渡せば、東の海底よりは日將に上らんとす、天水のけちめ猶辨すべく、一寸の遠帆影先づ赤し。

湖上の晩景

(夏) ○磯曲の曉色 湖上の晩景
晝の暑さを名残なう洗ふ夕立、まづ街道の一本松より霽れそ

七百七十一

◎時序
四周の山々
東西南北なか
こむ山

七彩云云
虹の形容なり

疾く起き
朝早く起るこ
こ

有明の景色
よあけの景

(夏)

○牽牛花

七百七十二

め、熨したるが如き湖面に、往來の白帆も輕し、四周の山々
愈みざりに、見るからに涼しさ滴らんとす。西の空には、
なほ沈みやらぬ夕日、一しほ明かに東の空を射、忽ちあらは
す七彩の虹の橋、晚鴉の一羽二羽、その邊を翔けり過ぐるなご
一刻の眺めながらも、繪にし難く、詩も及ばざる景なりしよ

牽牛花

昨日數へたきし花見んとて、妹と共に疾く起き出づれば、夢
よりも淡き残んの月かげ、白う垣根を照して、星も數ふるば
かりに、消なし有明の景色清く、世の塵うごき初めねば、あ
たり靜かに風亦涼し。朝顔は想ひしごと、物の美事に咲き、

露湛ふる風情やさしく、むらさき、白、瑠璃、その色さまざ
まなる嬉しく、未だ開かぬ物は、歌そ、のかし氣に筆に似る

海水浴

風情
やうす。おも
むき。

黄金云云
月の影きらめ
く波。

境涯
身の上を云ふ
こと。

朝は琴聲に似通ふ松風の下に浴し、鐵も鎔けん眞晝は、藻
の花かをる、磯曲の柳陰に釣試み、涼しさそよぐ黄昏には、
雪よりも白き砂踏みしだき、月上れば黄金碎くる波に浴す。
都塵を逃れて十日あまり、浮世忘る、鷗に伴ふ、さても樂し
き。此頃の境涯、十萬年までもと思ひぬ。

松風

◎時序

(夏)

○海水浴 松風

七百七十三

◎時序

茶寮
茶室を云ふ。

鐵騎
極めて驍勇なる騎兵。

金鐵云云
酷暑の形容。

(夏)

○森の清水

七百七十四

或は瑟瑟として、空に奏づる琴の如く、或は淙々として岸打つ濤の如く、之を山窓に聞くと、之を茶寮に聞くと、將之を磯館に聞くと、優にして雅。もし夫れ、月明かなる夜、之を古戰場に聞かば如何に、百千の鐵騎、先を競うて砂蹴り、霧地に相寄するが如けん。その聲の變幻窮りなき、誰か能く之を筆に盡し得べき。嗚呼、松風は神秘の曲、造化の樂。

森の清水

金鐵もどろけよと照りに照る、夏の眞晝を行きよわり、村はずれの小路を辿れば、行手に見ゆる夏木立、小暗きまでに茂り合ひ、稻荷社の屋根の一角は、杉の梢にあらはれ、朱の鳥

◎時序

森々として
樹木の盛んに茂るさま。

掬べと
兩手にてすくべども。

竹院
竹ある小座敷

修竹
長き竹を云ふ

居は、此方に見わて近く、石の鳥居は彼方に聳わて遠し。問はずとも疑ふまでもなき鎮守の森。やがて其處にさしか、りぬ。仰げば皆是れ千年の古木、あたり森々として滴る雫の一點二點、襟にそ、ぐ冷けさ、久しく居難き心地す。かたはらに、掬べと盡きぬ若清水、湧きにわきて溢れ分で、苔洗ふては音もなし、石に觸れては淙々と玉の韻をなして流る。暫し休らふ程に、今日の暑さも頓に忘れぬ。嗚呼、夏の人の命は清水なる哉。

竹院雨後

(夏) ○竹院雨後
常に暑さに苦しみし身も、昨日今日は稍しのぎよし。まして

七百七十五

時◎序

萬顆の玉
萬つぶもの玉
竹間に漏る玉
月影の形容。

美感
美の快感。詩
的趣味の感じ

(夏) ○竹 ▲ 雨後 七百七十六
修竹に音づる、雨後の風、さらりと涼しき聲を送り、日暮にもなれば、澄める月影を篩うて萬顆の玉を碎き、目に冴けき秋の影、耳にもしるき秋の聲、早くも一庭の中に音づれたり。まだ人間の秋立た、ねごも、一朝ごとに花瘦せて咲く朝顔の垣根には、水晶欺く露しげきに、時知り顔に鳴き初むる蟲の、二聲三聲、憐れにも又珍しう、詩歌に心寄せぬ吾れながらも、美感とやらに打たれぬ。仰げば、軒端に吊したる岐阜提灯の、影のさゆらぎにも、秋のけはひのほめきて嬉しく、流れ清き川べに螢追ひしも、縁した、る檜の樹陰に榻横へしも、今は夢なりけり。

紗燈
紗にて張りたる燈

人間の秋
この世の秋と云ふこと

銀河
天の河を云ふ

◎時序

○秋之部 秋新小品

暑さは昨日の夢、書齋の下に蟲鳴きそめ、紗燈の影を、ろ涼しく、夜色わきて清し。春は花、夏は風こそ、吾が命と思ひしも、今よりは書讀むこと、文作ることこそ命なるべし。速かぬ月の軒端に來り、呼ばぬ風の竹に戦ぎては、憂々たる玉の韻、まづ人間の秋に知らるべく嬉し、燭剪らでやは、筆執らでやは。

燈火可親

(秋) ○新秋小品 七百七十七
残暑を洗ふの疎雨、一點二點三點、仰げば一道の銀河、帯の

◎時序

頓に蘇生
にはかに生き
かへりたるこ
こ。

憐れなり
愛すべしとの
義。

昨日の夢
俄かに涼しく
なりしを云ふ

(秋) ○新秋小品

七百七十八

如く空低く流れ、涼しき影は白う軒端に落ち、飛なきに自
ら散る桐の一片、これも亦秋のしるし、久しきがほご暑さに
苦しみし身、頓に蘇生せる心地ぞする。彼の燈火新涼書可親
この句、げに理あり。蔓まだ枯れぬ朝顔の垣根には、今宵
しも蟲語りそめ、歌促しげなる殊に憐れなり。

海村の初秋

六十餘日が間、避暑の都人に賑ひし此處磯邊、一夜の雨に秋
しるく、波のたど島の影、水禽のは、たきまで、皆涼しから
ざるはなく、何とはなしに都戀しうなりぬ。日わく黄金の波
に浴し、松吹く飛に耳を澄したるは、げに昨日の夢、指折れ

◎時序

磯家
海邊に在る家
のここ。

吐く
口の中にて獨
語するを云ふ

蟲は尙
蟲は夜が明け
てもまだこの
意。

秋の聲

ば、吾れ身を磯家に寄せてより、五十日あまりを過せしなり
き。都の友のたよりに、暑期休業も終りに近し。此方も桐の
一葉に秋たちて、凌ぎよくなれりと言ひ越せるも、實に然な
りと知られぬ。朝日影浴びて濱邊に立てば、吹くとしもなき風
の、鬢に上りて冷けく、夏の幾日かを親しみし、避暑の人々
は、既に去りてあらず。歸り後れしは獨吾のみかと吐く、さ
ても可笑しき。歩にまかせて松原に至れば、蟲は尙昨夜の歌
を續けて涼しく鳴き、細き流れはいとも清うよき音にひびく
流石に見るもの、聞くもの、秋のしるしならぬはなし。

(秋) ○新秋小品

七百七十九

樹影云云
月あかるき秋
の夜のけしき

◎時序

月與梧桐尋
舊夢。秋將
蟋蟀作先聲
秋は來にけり
さの聯吳蘭雪
の句なり

(秋) ○新秋小品 七百八十
夢覺めし枕上に怪しき聲、雨にもあらず、風にもあらず、唯
颯々と断つ、續きつ響く。起ちて窓をひらけば、水のごと
澄みし空に明月か、り、地には樹影亂れしき、四邊静かなり
又忽ち怪しき聲、桐の葉にそよぐ、是れ秋聲なりける。

日記の後に

夏よりの怠りは、日記の白きにも知られて、いと恥かしけれ
ども、月は梧桐に來りて舊夢を尋ね、秋は蟋蟀を倩うて先聲
を作す此頃、吾家も亦興深きぞかし。西窓に書縞けば、燈火
のゆらぎ涼しく、階下に鳴きそむる蟲の聲々、いとも憐れに
詩道に暗き吾れさへ筆執り、句に耽ること抑幾度ぞ。吟ず

るに足る詩こそ賦し得ずとも、と打ち吐かれたり。

客中逢秋

一たび千里の客となりてより、こゝに十歳あまり、空しく故
山の花月夢に入るも、終に舊友の歡情に接せず。さらぬだに
愁ひもつ身の、うら寒き私風に枕をそはれては、更になし
く、吾が盡きぬ愁の縷を、さまざま何に織らんとてか、心あ
りげに鳴きそむる、蟲ぞいと憐れなり。

里の新秋

夕立名残りなう霽れわたれば、軒の玉水音も涼しく、月の光

◎時序

秋の縷
うれひに絲に
譬へ、其盡き
ざるを云ひし
語。

舊友の云云
ふるき友人と
相逢うて樂し
むを得ざるを
云ふ。

(秋) ○新秋小品

◎時序

試みる書燈
讀書せんこと
もす燈火。

榻
こしかけのこ
さ。場所によ
りては寢臺と
も解すべし。

一日
或日と云ふこ
と。

(秋) ○新秋小品

七百八十二

り清くして、夏ならねど、釣り残されし風鈴しきりに鳴り、
空は水の如くに澄み、秋を迎へし池の邊の梧竹、人と共に健
かに、初めて試みる書燈、又なき興なり。曾て午熱を避け、
松下に横へし榻、今宵は主もなく、露しとゞなり。蟲は時知
り顔にやさしく鳴きいて、早くも吾が草堂の秋を歌ひそめぬ
嗚呼、静けさよ、村の初秋。

長者屋敷の萩

黄菊白菊、さては紅葉の眺めは、尙幾夜かを重ねての後なる
も、野の愛づべきは、此頃の秋に非ずや。一日、訪ふとしも
なく、ふと歩を運びし長者屋敷、昔ながらの萩やさしく、花

◎時序

流石に
長者屋敷と云
はる、程あり
てその義。

逍遙へば
ぶらつけばさ
の義。

風曉月殘
夜明のけしき
を云ふ。

(秋) ○新秋小品

七百八十三

少し早けれども、争はれぬ秋のしるしに、白き或は紫なる
が咲き初め、年久しく住みすてし荒屋敷も、流石に奥床しく
も又幽艶のたもむき、絶て訪ふ人もなけれど、逝きし長者
が未死の魂にや、雨後の眞晝を優しき音に歌ふ蟲、いとゞ吾
をして、懐古の念に堪へざらしめぬ。尙そこはかどなく逍遙
へば、小高き地には礎石残る。苔蒸したる一片の石なれど、
長者全盛時代、雨に傘さ、せて萩見しことも、月に簾まかせ
て秋賞せしことも、語らすとも能く偲ばる。此處に昔、宴飲
にあてし小亭ありしとぞ。蓮池は、名のみにして當日の影な
けれど、また風曉月殘の舊夢を偲ぶに足るぞかし。人よ、萩
見んとなら、必ず長者屋敷に遊べかし。

◎時序

(秋)

○清光萬里

七百八十四

清光萬里

中秋
八月十五日
の夜。秋の
もな

清光
明かなる
月の
光り。

孤酌
獨酌と云ふ
に
同じ。

三日月の頃より待ちし今宵哉、とは芭蕉翁が中秋の十七
字詩。觀月には遊興さまざま、十里の長江に棹さすも宜
しく、百尺の溪樓に酌むも宜しく、さては松院や竹亭、
人々の擇ぶが儘なり。
一痕の月、兩地のたもひ、客舎に故園に、想思を照さす
るも亦宜しく、水の如き清光浴しつ、砂白く松青き、
海濱の逍遙は云ふまでもなく、名なき磯曲も月には景色
はゆべく、草堂の孤酌たれか、情趣なしと云ふべき。此
には、月に係るもの、數章の作を擧ぐ。

◎時序

(秋)

○新秋小品

七百八十五

雨後の名月

名月
十五夜の月。
特に八月十五
夜の月の稱。
中秋の月。

壁云云
月の影の水中
に在りて動か
ぬを云ふ。

雅集
風流なる集會

人をかこたしめし、宵のはごの雨、心ありげに霽れにはれ、
水よりも清う澄み渡れる、目路も遙けき千里の空に、月は鏡
をみがきつ、照す山川明かに、げに繪を欺くばかりの秋の
景色、自ら棹執りて湖に泛べば、紛々として金波碎け、船を
停むれば壁、水底に沈む。更たくるに従うて、天いよく高
く、月いよく小に、湖岸に千尺の絶壁あらしめば、蘇翁赤
絶の遊に同じきなり。

雅集小記

四時序

氷輪
曇りなき月の
形容語。

清賞
よき眺めを云
ふ義。

壁に云云
壁上に詩を書
きてその義。

(秋) ○新 秋 小 品

七百八十六

簾を捲き、東山の暮嵐を座に入れ、殊更に燭を滅して月の上
るを待つ。既にして氷輪出づ、皆快を呼ぶ。清光真に萬里、
星の影稀に、雁の過ぐる一々數ふべし。其漸く高くなるに至
れば、吾が衣に満てるの氷彩拂へども落ちず、庭に遍きの水
光は凝りて流れんとし、小亭は恰も湖に泛ぶが如し。余等は
共に韻を拈して詩を賦し、東の白む頃までもと相樂しめり。
去歲は、雨に妨げられて清賞を缺きしも、今宵は是の如き良
景に遇ひ、しかも月よりも圓き心あひの友と、献じつ酬いつ
唱へつ和しつ、限りなきの興を遣り得たり。其快や甚しく
筆にして人に示し難けれど、各得し所の詩を壁に題して去
りぬ。相會する者五人、某々等なりき。

縹緲

かすかなるま
ま。

島と云ふ島
島毎に云ふ
義。

雁字
空行く雁の列
な字に見たて
て云ひし語。

◎時序

九十九島の月

大小の島嶼すべて九十九、縹緲として煙波に暮る、の夕、新
潮に洗ひ出されし一輪の明月、島といふ島の松に掛りし趣
日本三景の一たる、松島の秋も此處に勝るまじとぞ思ふ。あ
はれ此島、名いまだ世に知られざれど、西海の一孤島たる平
戸の東南海上にして、佐世保軍港に近し。今宵は分きて心ゆ
くばかりに晴れ、千里のはて迄も見渡され、此方彼方に往交
ふ白帆を數へられ、空に横ふ雁字も讀まれぬ、棹さし到る處
黄金の波湧かざるはなく、白を擧げ詩を思ふの時、興深から
ざるはなし。今はと舟を回し、千里が濱に棹停むれば、名に

(秋) ○新 秋 小 品

七百八十七

◎時序
白砂一句
千里ヶ濱の砂
白く景清きを
云ひし語。

朗吟
聲ほがらかに
歌ふこと。

詩人を玉に
月光の清く人
を照すを云ふ

應接に云云
見るにいそが
しからしむさ
の義。

規模
其地の形勢あ
りさま。

坡翁云云
死した蘇東坡
を呼び来てこ
の義。

◎時序

(秋) ○新秋小品 七百八十八
負ま白砂雪欺くばかり、月は空に牙ゆれど影を地に印せず、
四望只不夜城とかと疑はれぬ。

湖の観月

船の湖心に到ると共に、恰も月を東山に得たり。余等互に快
を呼び、金波湧く中に杯を擧げ、朗吟を縦にす。日暮に人
を惱したる雨、今し、名残う霽れ渡り、水よりも清う澄みた
る空には、星のかけ稀に、過ぎゆく雁の數もかぞへられ、水
彩衣に返りて詩人を玉にせんぞす。棹さして小島近う秋を弄
べば、微風松を渡りて小琴を奏で、天女の樂かとも疑はれ、
興はいよく夜と共に深し。あはれ、此邊崖高く渚曲り、老

樹怪岩互に奇を呈し、應接に違あらざらしむ。而して月天
心の中すれば、則ち山高く月小く、水落ち石出づるの景あり
此處、小赤壁とも呼びたげなり。こを聞き、友説をなして曰
く。聞くが如くは、赤壁は規模大ならずと。此湖や周回三里
四周の青山は翠屏を遶らし、小島には松あり。辨天祠あり、
岸高きこと、何ぞ雷に千尺のみならん。坡翁を地下に起し、
今宵しも此處に秋を弄さしめば、果して如何なる賦をば得べ
き乎と。余笑うて曰く、絶景は多く名士の筆によりて著る、
君も亦雄篇を世に示すべきなりと。傾く月に舟を返しぬ。

客 中

(秋) ○新秋小

◎時序

砧聲萬戸
多くの家に打
つきのぬたの聲

十年の落托
長き間の落ち
ぶれ。

干潟
無びきて土の
あらはるゝこ
こ。又その地

(秋) ○松島の秋

七百九十

月光千里、郷愁を照して明かに、砧聲萬戸、客夢を驚して
寒し。征人の俯仰するところ、一として銷魂の種ならざるは
なく、天地の秋の悲しみを、吾が身に鍾めたりと思ふも、理
なきに非ざるべし。況して、十年の落托、ところ定めぬ浮草
の跡を、紅葉散る江村に托するをや。

松島の秋

松島は日本三景の一にして、余は推して其第一とす。松
島灣は、塩竈の東代ヶ崎より、松島村磯崎を遶りて東
北丸山岬に及ぶ一大灣、水深からずと雖も干潟とならず
満潮七尺、干潮三尺、海上には所謂八百八島の島々、星

◎時序

星散碁布
かくし此處に
點在するを云
ふ。

渭川云云
渭川は竹の名
所。故に竹多
し。云ふ義さ
す。

扶桑
日本の別名。

(秋)

○松島の秋

七百九十一

散碁布し、其大となく小となく、悉く松樹を戴くが嬉
しく、獨り福浦島のみ。修竹萬竿、渭川の富あり。此處
霞む春の日も、涼しき夏の候も、秋の月を弄ぶにも亦
雪にも宜し。釋南山、歌うて曰く、
天下有山水。各擅一方美。衆美歸松島。
天下無山水。
是れ松島の爲に氣な吐くもの、芭蕉翁の記には、
抑もことふりにたれど、松島は扶桑第一の風好にし
て、凡洞庭西湖を恥かしむ。東南より海を入れて、
江の中三里、浙江の潮をたふ。島々のかずを盡し
て、敬つものは天を指しふすものは、波に匍匐し、

匍匐以下
島々の形容な
り。

ちはや振
神。人などに
冠らする語。

備忘
忘れざる爲の
用意。

◎時序

(秋)

○松島の秋

七百九十二

あるは、二重にかたより、三層に疊みて、左にわか
れ、右につらなる、負ふあり、抱けるあり、兒孫を
愛すが如し。松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹きた
わめて、屈曲たのづからためたるが如し。其氣色皆
然として、美人の顔を粧ふ。ちはや振神世のむかし
大山すみのなせるわざにや、造化の天工、いづれの
人か、筆をふるひ、詞を盡さん。
と。其景勝すでに盡し難しと云ふなるを、吾れ漫に筆執
る、松島の靈を汚すべきも、旅の土産の代りにと、日記
の幾頁かを埋めたり。敢て松島の記と云ふにあらず、備
忘のためぞ。

入相の鐘
日暮につく鐘
の音。

邊土の遺風
國のはての名
義の風俗その

細絃
つまびきする
三味線。

◎時序

秋 一 棹

鹽竈の浦に入柑の鐘を聞き、さみだれの空、いさ、か晴れて
夕月夜かすかに、籬ヶ島もほど近し。蟹の小舟こぎつれて、
肴わかつ聲々に、綱手かなしも、と詠みけん心も知られて、
いとあはれなり。その夜、めくら法師の、琵琶を鳴らして奥
淨瑠璃といふものを語る。平家にもあらず、舞にもあらず、
鄙びたる聲うちあげて。枕近うかしましけれど、さすがに、
邊土の遺風の忘れざるものから、殊勝に覺わらる。とは芭蕉
翁が記の一節、今し五月雨の頃ならず、天高く氣清き秋、奥
淨瑠璃は聞くに由なく、たゞ細絃に和する艶々しき歌、夜深

(秋)

○松島の秋

七百九十三

◎時序

一棹ごとに
棹移すたびの
義

土人
その地の人。
土着の人。里
人。

説く
言ふ。説明す
る案内するさ
の義。

(秋) ○松島の秋

七百九十四

う響くも悪く、獨り幾杯かを重ねし酔夢覺むれば、前夜に約
したける舟、早くも待てりと余を促すは旗亭の主、飯終へて
舟に乗る。
湖水よりも清き海、一棹ごとに景漸く加り、時に或は島の
岸に沿ひ、時に或は島遠く離れ、時に或は島と島との中間を
行き、時に或は右に左、時に或は舟返しつ、半日が程を畫中
に漂ふ。土人は七浦、八崎、八島を説げども、其は一部分の
勝のみ。又、古八景、新八景、目あれども、是も亦漫に八景
に拘泥したるもの。松島灣の勝、何ぞ是等に畫くべきぞ。
舟子、余が爲に島の名を説く頗る精しく、今々を一々記し
難けれど、大なるものは山の如く、小なるものは拳の如く、

◎時序

宮戸島以下
島々を總括し
て云ふ。

千態云云
目さきの景色
さまざまに變
るを云ふ。

(秋) ○松島の秋

七百九十五

或は巨鯨の波に臥するが如く、虎の嘯くが如く、龍の蟠る
が如く、眼に觸る、の島、相送り相迎へ、一棹移せば既に同
じき島を見るに由なく、島と島とを重ねては海盡くるかと
疑ひ、前めばそは忽ち開けて左右に又島幾つも浮ぶ。所謂千
態萬狀、變幻きはまりなし。
八百八島の名、蓋し其多きに取りたるべけれど、何とて一
々之を列擧し得べき。其大なるものを問は、宮戸島、寒風
澤島と答へん。名の痴なるものを問は、親に勘當裸島、育
子島、ひるね島、繼子島等にして、大鍋、小鍋島も此中に入
るべくや。其雅なるものには先づ都鳥、内裡島、化粧島、
桂島、浪華島等なるべく、天女とは古めかしけれど、無くて

◎時序

午下
正午すぎ。

水中の天
天のうつろ清
き水にその義

四大観
四つに見るに
足るべきものに

(秋) ○松島の秋

七百九十六

ならぬ名なるべく、大鼓、小鼓、舞鶴、卯花島等の名は優し
と云ふべし。其最も名の著れしものは福浦島、經島、雄島、
とこそ云ふべけれ。

午下も尙、處定めず波のまに、白鷗と去來を共にし、
清き水中の天に棹し、島近う寄せては、斷岸の下に松の
影を碎き、有らゆる島を訪ひ盡し、宮古島に上陸しては、大
鷹森に上り、馬放島にては多聞山にも上り全灣の勝を縦に
しぬ。この二山は松島四大観の中にして、他の扇溪と富山と
は、之を明日試みん筈なり。今遊、秋とは云へど月なし。夕
日に湧く銀、波碎き、舟を松島部落の岸に棄てぬ。
松島に遊ぶ者、如何に細かに棹さし盡すとも、賞する所は

四大観

局部の觀のみ。秀麗なる全洲の景を一瞬に收めんとなら
ば、須く身を高き致さる可らず。是に於てか、富山、
扇溪、多聞山、大鷹森を推し、松島の四大観と云ふ。

新富山
この山松島村
に在りて加へ
て五大観とな
す。

◎時序

(秋) ○松島の秋

七百九十七

一夜宿りし松島には、瑞巖寺の大伽藍、五大堂、觀瀾亭
さては雄島の勝蹟、記すべき事ども多ければ、そは最後
にし、此には四大観の大観たる所以の筆執るべきも、全
灣の勝景、文中に出現し得ざるを恨む。
多聞山は、馬放島に在り、代ヶ崎の前に點在して相距る一町
許、環海五口の一、一に青海島とも云ふ。位地は松島灣の南

雲鬢
天際又は雲の
かゝれる遠山
の形容。

◎時序

世外の境
浮世の以外の
地。

白玉云云
秋の海の水の
清きを云ひし
語。

掌上云々
手に取る如く
眺めらるゝさ
の義。

寸帆
沖遠くを走す
る帆即ち遠く
行く船。

磴道
石段のある道

◎時序

(秋) ○松島の秋

七百九十八

端にして、東には天水相接し、眼を極めがたき外洋を見、波上に雲鬢を弄するは金華山、南の沿岸は曲々として其盡くる所を知らず、景風に俊賞に宜し。北西は則ち群島星散、前に訪ひしもの、近きは一々指點し得べし。
大鷹森は、宮戸島に聳ゆる太平山上の稱なり。一に大高峰とも云ひ、其高さ他に勝れ、島も亦松島灣中第一の巨島、宮渡又は皇都に作らる。野蒜港の西南海面にして、周回四里十八町、島中一村を成し、住民は半農半漁、晴に耕し雨に釣する世外の境、寒風澤島と相距る僅かに五六町、島の西端を里濱、南を月濱、東北を大濱、室の濱と稱し、所謂宮戸の四濱なり。山上に立ちて見渡せば、同じ島々を望むもの、此處

は格別の眺め、白玉盤上かと疑はる、秋の入江、遠近に點在する大小の島々、或は濃く或は淡く、悉く之を掌上に弄し得べし。俯すれば東、近く野蒜港に對し、一帯の白砂は十里、青山と映帶し、其眺め東南に盡くれば牡鹿半島、雲に聳わて雄々しきは金華山より、東は茫茫たる大洋、往來の寸帆まれに、巨鯨の潮を噴くものあるのみならん。登山者をして心胸豁如、恍として此世を忘れしむ。島の周邊には小島殊に多く又觀るに足る勝少なからざりき。

扇溪は一に鷗沙灣にも作り、大澤を云ふ。瑞巖寺より一里許、鹽竈と松島との中間に位し、磴道數十級通じ、人を絶頂に導く。眺望は南東に打ち開け、灣内の群島を双眸に收め得

(秋) ○松島の秋

七百九十九

◎時序

細波
さらく寄する波。

隨一
第一の義。

詞人墨客
風流にたつきはる人。

(秋) ○松島の秋

八百

て、且つ四顧の雲煙をほしひま、にす。其規模、富山の如く廣ならざるも、山勢兩斷し、灣の深く入りたる趣、細波脚下に寄するさま、嵐影水光映帶の妙、却て此處に在るべくや伊達綱村、常に此地の風光を愛し歩を枉げたりとかや、名残として茶亭の跡存す。曾て峯頭に海無量寺あり、その達磨堂は、最も有名なりしも焼けてなく、今し僅かに一草庵を立て其遺蹟を留む。

富山は一に富有山にも作り、四大觀の隨一、松島村大字手樽に屬し、松島町より東北二里餘、二百年來詞人墨客の尋ね來し此處、先づ山下に至れば、農家八九戸、既に畫の如き觀を作す。凡そ嶺上に達するには、磴道數百級を攀づくべく、前

◎時序

精舎
寺のこと。

全勝云々
公景を見てたのしむによじの義。

大悲閣
觀音堂のこと

(秋) ○松島の秋

八百一

めば老檜古杉いや茂り、森々として晝も尙暗く、嵐氣亦衣に透りて寒し。半腹に精舎あり、大仰寺と云ふ。此處、松島灣の全島を撫するに宜し。院中より見渡せば、東に金華山を遠望し、石の巻、日和山をも見、西には相島の諸峰起伏し、東灘のニツ森に至るまで、之を掌上に弄し得べく、灣中の群嶼は大どなく小どなく、點々として烟波の間に浮沈するに似、漁舟の蓆帆、鹽舎の煙、亦是れ畫中の景物、宛然庭上の池水に對するの觀あり。是に於てか、松島に遊ぶものは、必ず此に登るべきを云ひ、富山に味ければ、猶瑤池に觴して玉母に賓せざるがごとしと嘲る。山巔に大悲閣あり、大同年中阪上田村麿の建立に係り、奥州三觀音の一に班し、其閣畔には將

◎時序

(秋) ○松島の秋
軍馬上戎装の像あり。

八百二

理由
いはれ。わけ。

上聞
天子のお聞き
教聞と云ふに
同じ。

人海
此世。即ち塵
世。

雄 島

位置は竹浦の東面にして、歌枕には小島、又は千松島に作るも、頼賢の碑には御島と見ゆ。理由に二つあり、一は日本武尊東征の時、この島に憩ひ給ひしと云ふに基づき、一は見佛上人此に栖み、その法力深きこと鳥羽帝の上聞に達し、佛像器物を賜りしに基づくと云ふ。島の右には嶺あり、千株の松みどり濃く、秋の月懸りては葉間に金を碎き、眺め轉奇しく左に屏風島を控へて架するに長橋あり。橋過ぎて幽徑に入ば千古の苔碧に松風濤に沸かし、既に人海を去る遠きを覺ぬ

◎時序

任を治め
旅行の用意を
なし。

徳慧名望
道徳智識のほ
まれ。

精勵刻苦
修行にはげみ
難儀するこま

(秋)

◎松島の秋

八百三

島中に訪ふべきは松吟庵、見佛堂、坐禪堂あり。松吟庵といふは妙覺庵の舊跡、見佛上人及び頼賢和尚などの住せし處とて名高し。見佛堂は、見佛上人此に在りて、精勵刻苦十二年の久しきに亘り、法華經滿六萬部を誦讀せし處、里人は奥院と云ふ。坐禪堂は、寛永中雲居禪師の建つる所、把不住軒の四字を匾額とせり。雲居は塙團右衛門の子、逸事載せて近古史談にあり、曰く、
雲居和尚は、塙團右衛門の子なり。徳慧名望一時に高かりき。團の大阪役に死する、雲居その遺骸を索め、厚く之を葬り、遂に任を治め奥州に赴く。蓋し、國主の聘ありしを以てなり。路を東山に取り、青野原に出づ。草賊

草賊
小ぬすびこ。

◎時序

不腆の腰纏
多くもあらぬ
旅費の義。

錫
僧のつく一種
の杖。しやく
ぢやう。

(秋)

◎松島の秋

八百四

七人あり、路を遮り來り逼つて曰く、奴輩饑寒に苦しむ
貴僧の草鞋錢を乞はんと欲す。雲居從容、之に應へて
曰く、不腆の腰纏、公等の窮を御ぐを得ば、幸なりと
囊を擧げ之に付して行く。盜等囊を傾けて七金を得、各
其一分ち、猶尾して來る。曰く、衣帶を併せ之を得ん
と欲する。雲居是に於て、錫を抛ちて曰く、甚しい哉
公等の悟らざるや。夫れ千里裸跣、緇徒と雖も爲すべか
らず、公等必ず之を得んと欲せば、請ふ身命を並せて之
を取れと、端坐して動かざりき。盜等惻然として感悟し
相告げて謂ふ、吾輩久しく剽掠を行ひ、未だ舉止整暇此
の如きを見ず。是れ必ず高德の僧ならんと、各其金を

羅拜
列びて坐しじ
ぎするを云ふ

踞して
腰かけて。

佇立
立ちどまりま
る

◎時序

(秋)

◎松島の秋

八百五

返し、路旁に羅拜して曰く、願くは髮を剃り弟子となら
ん、幸に前過を恕せと。雲居乃ち起ちて曰く、公等苟
も此の如くなれば、貧道も亦敢て辭せずと。遂に相從へ
松島の瑞巖寺に至る。後皆業を修め、各一庵の住僧と
爲りたりき。
寧靜子曰く、余之を郷人に聞く、雲居の瑞巖寺に在り
しとき、毎夜御島の石窟に往き、坐禪す。一少年あり、
其悟道を験せんと欲し、路旁の松梢に踞して以て待ちぬ
雲居至る。則ち手にて固く其頭を攫めば、雲居佇立して
動かす、乃ち之を放つ。後數日、其人問うて曰く、師怪
を見ずやと。雲居曰く、見るなし。但嘗て暗中物あり、

◎時序

超悟僧
普通に越えて
悟りの道を開
きたる僧

德治
後二條帝の御
宇

雄健
たつしやなる
こと

(秋) ○松島の秋

八百六

吾が頭を擧みたり。吾れ其手内の温暖なるを覺ふ、以て少年輩戯を爲す耳と。此事を併せ觀る、雲居の超悟僧たる、益想ふべきなり。

寧靜子とは、大槻磐溪の別號、仙臺の儒臣なり。

賴賢碑は、坐禪堂の南に建つ。高さ一丈、幅三尺六寸乃至四尺三寸、厚さ七寸、宋僧一山一寧の文並に書する所、德治三年春徒弟匡心、孤運等の建設に係る。碣首に、奥州妙覺菴賴賢菴主碑銘並序の十三字を楷字二行に書す。砂文は草書、その文は觀るに足らずと雖も、書は當世に名ありし事とて、流石に筆力雄健なり。觀鏡坊賴賢は御島の住僧にして、道德高く法力深かりしとぞ。

◎時序

隱見
見ぬつ隱れつ
するこそ寺院
の樹間に標榜
するを云ふ

旗亭
旅舎又は酒樓
の稱

五 大 堂

松島は松島村の大字にして、正しく灣の中央海濱を占め、居り、左すれば五大堂、右は雄島にして瑞巖寺の樓閣、後山松樹の間に隱見し、般若、福浦、經ヶ島、仙冠等の島々は其前面に星散し、遠くは宮戸、寒風澤の二島をはじめ、野々島、桂島、石濱等烟波縹緲の間に出没し、津頭の眺め殊に宜しく、戸數二百餘、名ある旗亭も少なからず、小繁華の市街を成し、附近には觀瀾亭、阿彌陀山を最先に天童庵、松島橋も亦觀るべきもの、一なり。

五大堂は、松島の濱邊にある離島、松島橋とて名高きもの、

(秋) ○松島の秋

八百七

時◎序

五大尊
不動、降三世。
軍吒利夜叉。
大威徳。金剛
夜叉の稱。

創建
初めて建立す
ること。

(秋) ○松島の秋

八百八

天童庵との此島との間に架る。島上に一字あり、五大堂と云ひ、五大尊像を安置す、故に此稱あるなり。相傳ふ、大同二年、阪上田村麿東征のときの建立と。又一説に曰く、田村麿のとき、毘沙門を此に安置し、五大尊は慈覺大師の時に之を置きり。慶長五年、藩祖政宗卿紀州の良工鶴左衛門等に修造せしめ、以て今日に至れり。

瑞 巖 寺

此寺、京都妙心寺の末、臨濟宗にして青龍山瑞巖圓福寺と稱す。古くは松島寺と云ひ、淳和天皇の天長五年戊申、慈覺大師の創建。或は云ふ、仁明天皇承知五年の建立にして、

開祖
開山と云ふに
同じ。

唐僧
支那の僧との
義。

土木云云
建築工事をほ
じむること。

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百九

當時は青龍山延福寺と稱し、天台宗を奉じたりと。のち最明寺時頼こ、に來り、法身上人と約し、天台宗を改めて禪宗とし、松島山圓福寺と稱し、法身を推して開祖とせり。法身は眞壁平四郎の後身、その僧となりて宋に入るや、法を經山の無準に受け、歸朝したるもの。是より大覺、覺雄、智覺、覺滿、明極などの唐僧來り住したり。其九十一世、義山和尚に至りて鎌倉建長寺派となれり。慶長十年、伊達政宗新に土木を起し、紀州の良匠刑部左衛門國次なる者を召し、再び堂宇を造營し、同十四年に至り、七堂伽藍落成し、その輪奐の美實に東奥に冠たりき。且つ政宗親ら、堂前に栽うるに五葉松一株を以てし、詠まれけるは

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百十

請じて
義 招聘してその

寛文
後西院帝の御
宇

黄門
中納言の雲名

松島の松の齡も此寺の末榮になん年はふるごも
と。やがて僧海晏を請じて住持とし、同時に瑞巖圓福禪寺と
改め、伊達家の菩提所とせられたり。
佛殿は堅二十間、横十二間、正面に胡銅の聖觀世音を安置
す。この尊像は、天竺渡來のものにて、本寺開基の頃より本
尊となせり。一説には、弘法大師の作なりとも云へり。雄島
の條にも云ひし、雲居和尚は寛文十三年、少將忠宗先公の遺
命によりて、招聘して中興開山としたるにて、寺中には黄門
政宗甲冑したる像を安置し、其側には殉死者二十人の靈牌を
列す。のち忠宗に殉死したる十七士の靈牌とも併せ列しあり
往古に於ける、殉死の奇習を偲ぶに足る。

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百十一

名工の技
上手の木工の
細工

精巧云云
此上もなく精
美巧妙を極む
るを云ふ

御巡狩
天子の地方へ
の幸行を云ふ

寺の間取には奥の間、上段、中段、孔雀の間、文王の間、
菊の間、櫻の間、墨繪の間、鷹の間等に區分せられ、格子や
天井や欄間などの彫刻は、何れも諸國名工の技に成るものに
して、精巧その極に達し、大小障子等の書も亦有名なる書家
の筆に成り、一見目を驚かすばかりなりとかや。奥の間は、
一に上々段と稱し、藩主政宗と雖も、嘗て上られしことなき
室、明治九年、今上帝東北に御巡狩の折、當山を行在所に充
てさせられ、此間を以て御座に供し奉れり。今碑あり、千
古之を表せり。碑の篆額は、岩倉右大臣。撰文は、杉宮内大
輔。書は、金井内閣大書記官なり。
庭前なる八房の梅は、政宗征韓役の歸朝當時、遙かに齎す

◎時序

同種
同一のたれ同
じ種類。

靈廟
たまや。廟所。

星散
島の點在する
形容。

(秋) ○松島の秋

八百十二

所、仙臺市櫻岡公園のものと同種なり。法身窟は一に無相窟と稱し、寺の左に在る岩窟のことにて、堅四間二尺、横四間一尺五寸、數十人を容るべし。此處よ、最妙寺時頼の法身上人と改宗を約したる舊蹟と傳ふ。
陽明院は之を寺の左に、天麟、圓通の二院は之を右に訪ふべく、共に伊達家の靈廟にして、結構偉麗、之を維新前に比すれば、金碧の光り目を眩せしめざるも、尙昔時の輪奐の美を想はしむ。獨鈷泉は、陽徳院の後にあり。簷端の梅は、圓通院の畔に訪ふべし。貞女紅蓮の故事あるは是。寺の地たるや、青山を負ふて碧波に枕み、星散する無数の島々を眼にすべく、最も月に宜し。政宗中秋の絶句に曰く。

今宵待月倚吟筇。滄海茫茫一氣濃。思見清光佳興荐。

道人緩打五更鐘。

巧拙は兎も角、地形を知るに足るべし。而して山門の左右は悉く市店にして、旅舎や酒閣、多くは雲に入るの結構、松島灣を俯瞰し、氣象萬千、之を双眸に收むべし。

觀 瀾 亭

筆
書きたるもの
筆蹟と云ふに
同じ。

山門
寺の門のこと

雲に云云
高く時つきの
形容。

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百十三

先づ目に入るは二個の扁額、一は觀瀾亭の三字、佐々木文山の筆なり。一は雨奇晴好の四字、仙臺中將吉村公の筆なり。蓋し此四字は、蘇東坡が西湖の詩に取りけるなり。此處、風光絶美、月の夜は言ふまでもなく、真に晴にも雨にも宜しか

◎時序

遊息の地
遊びたのしむ

有となれり
所有に屬せり
その義。

古來
むかしよりさ
の義。

(秋) ○松島の秋

八百十四

らぬはなく、政宗トして遊息の地とする、固より以なきに非ず。之を瑞巖寺の南、觀月崎に訪ふて、亭は政宗、豊太閣より受くる所の、伏見の行殿を移して此に建つと傳へられ、巖壁亂松の間に構へられ、其柱は榊の四方面、或は唐木なりとも傳へられ、外圍とせる貝玉垣の如きも、亦伏見より移せるもの、由、明治二十年以來、伊達家の有となる。

松島橋

一に洗橋、又は渡江橋と云ひ、天童庵と五大堂との間に架けられし二ツの橋、一は長さ三間、一は六間、古來の名橋にして、民部卿忠教の和歌に、藤咲さか、る松島の橋といへるは

振古の社

おほむかしの
神社。

湫隘

濕地にして狹
なり。

勝書樓

今は無し。

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百十五

勝書樓

即ち是ぞ、二橋の間に八幡祠あり、舒明天皇の八幡勅使は此祠にして、振古の社なり。
附記す。松島にして訪ふべきもの尙、阿彌陀山、青春磯、天童庵、不老山、東灘など一々挙げ難きも、此には略したき、諸名家の筆を借り、此記の不足を補ふべし。

浦瀨灣を成し、市塵湫隘なり。近時加ふるに海を填め、停車場を置くを以て、眸を放つべきなし。獨勝書樓のみ巖角に踞し、遠く海面を望む。島嶼基峙星羅し、其最も近きを離島となす。樹木鬱然として翠光掬すべし。聞く、此樓舊法蓮寺に屬し、仙臺侯の遊覽せる處なりしと。獅山公吉村、自ら勝

◎時序

侯伯の氣象
大名の氣風の
見ゆるを云ふ

鹽浦
監釜を云ふ。

凡庸
普通。世のつ
ねなみ。

(秋) ○松島の秋

八百十六

畫樓の三字を書す。筆力蒼勁、侯伯の氣象あり。采思、侯家の徽章を刻す。尙當時の威儀を想見す。寺廢り樓獨存す。松島の勝、應に此より始るべし。

鹽浦撒珠

舟を埠口に買ひ、布帆風に飽き、島を遠りて行く。大小高低形容同じからず。緑珠を玻璃盆中に撒するが如し。松を鬚髪と成し、石を軀幹と爲す。其脚は潮に洗磨せられ、猶皮毛を剥ぎたるが如く然り。自ら雁状を成す。舟、島間に出づ。相逐ふが如く、相迫るが如し。忽ち離れ、忽ち合し、迎へて來るものあり、辭して去るものあり。初め見て凡庸とせしものも、忽ち之に迫れば、其奇怪に驚かる。遠望して以て小にし

◎時序

異云々
すぐれたなめ

規模
區域又は形勢

約略
略してつゝむ

(秋) ○松島の秋

八百十七

て、且つ陋なりとせしもの、忽ち之に近づけば、其俊にして異なるを愛す。名稱極めて多し、今必ずしも贅せざる也。

鹽浦と松島とは、地異なりと雖も、島嶼海面に亂點するは形容相似たり。但彼は規模稍狭く、此は則ち瀛海萬里、潮汐吞吐し、島嶼の多きこと勝つて數ふべからず。南山の所謂衆美歸松島、天下無山水、とは是なり。其大なる者は二十餘、小なる者は之を遠ること、猶星宿の太陽を環りて、布置錯落するがごとし、或は近く、或は遠く、意あるが如く、意なきが如く、一筆を以て之を形容せんと欲すれども、牽合附會に涉らんことを恐る。約略之を述るに若かざる也。

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百十八

放馬拔群

特起 放馬島、諸書之を鹽浦に屬せしむ。東西高さ十五町、南北之に半す。相傳ふ、鹽竈祠の神馬老いて、此に放ちたり、故に名づく。凡そ孤嶼多く特起し、潮水迫る。岩石の奇ありと雖も、沙灣の趣なし。此島、西のかた諸島の陰にあり。潮甚だ怒らず、白砂灣曲し、又岸嘴多く、犬牙錯出し、位置頗る佳なり。遠近の諸島、互に相映帶す。最高の處に登りて之を望めば、富山扇溪と景致自ら列なり。亦諸島中に於て拔群と稱すべし。

金剛搜奇

余、北海復軒の二君と扇溪に遊ばんと欲し、舟を浮べ、多度

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百十九

異境 すぐれたる地

神斧鬼削 造化自然の形 即ち人間わざにあらざるを云ふ。

津島を過ぐ。北海其灣倚を見、舟人に命じて、岸に就かしむ果して異境なりき。巖に沿ひて往けば、島裂けし二となり、奇峰の拔起するあり。上に瘦松あり、草樹茂鬱す。復軒、徑を求めて登る。未だ數歩ならずして、馳せ下りて曰く、隣島頗る奇なり、盍ぞ之を搜らざること。舟を反して進むに、一島を得、蓋し金剛島なり。一名屋形島なり、巖峻しくして登るべからず、遠りて行く。島嘴石門あり、門を隔つる一島、神斧鬼削、世の畫く所の蓬萊の如く然り。島外の大洋、奔陶洶湧す。舟を命じて其間に出で、一蹕して過ぐ。心目爲に眩す世に眼鏡島を稱して其奇を愛し、此島の最も奇なることを知らず。

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百二十

織波云々

細波の起る形容

青螺萬點

小島の多きを云ふ

雋逸

すぐるるこそ

扇溪探幽

放馬島より西北に向ひ、馳せて釜淵に入る。亂島回環し、織波織るが如し。岸に沿ひて往き、一灣を得、之を大澤とす。峰脚海に向ひて開くあり、摺扇形を成す。寺、其巔に踞す、海無量寺と曰ふ。俯して海を望めば、青螺萬點、空に浮ぶが如く、峯巒遠近相映す。蓋し便面の山水なり。寺は肯山公綱村の建てし所、瑪瑙の十六羅漢、極めて珍奇とす。客歳災に遇ひ、盡く灰燼に付したりしが、近ろ再建し、山道を修治し、地を穿ちて一斷碑字を得たり。體略雄島の寧一山の書する所の碑と相類す。草體雋逸にして愛すべし。亦昆山の片玉なり。

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百二十一

秘奥を闡明

隠れたる景を明かにするを云ふ

五大觀

四大觀に松島村の新富山を加へたるもの

大高究莊

仙臺人舟山萬年、松島の勝を愛し、探討尋究し。秘奥を闡明し、遂に定めて五大觀となす。各主たる所あり。特に宮戸島の大高峰を以て壯觀とせり。然れども遊ぶものは率ね一日を以て準とすれば、舟鹽釜より松島村に至り、島嶼の洋面に亂點するを見。觀此に止まれりと謂ひ。復力を費して探求せず。大高峰を知る者なし。北海の職。官林を主るを以て。屢島中に往來し。奇境妙景遠きとも至らざるなし。大高山を以て最も勝れりとす。曰く、他は率ね三面を望み、此は四方を眺む。他は陸より海を望み、杳茫として際なし。此は海より陸を望む。山嶽景を助く。加ふるに瀕岸奇巖怪石、層見疊出

時◎序

從憑
勸むるこ。

島嘴
島の岬角を云ふ。

浮屠
寺の塔を云ふ。

(秋) ○松島の秋

八百二十三

するを以てす。故に松島に遊びて、大高峰に遊ばずんば眞に松島を知る者にあらず。四月二十三日、余を從憑し、舟を買うて直に宮戸島を指す。往くこと二里にして達す。攀援して登ること五六町、俯して山麓を瞰れば、島嘴海中に出づるもの甚だ多し。或は延長數十間に亘り、形城壁の如し。或は特記して樓櫓の如く、或は孤峭して浮屠の如し。亂松其上に植つ。西のかた船形、不忘の諸山を天際に望めば、白雪銀の如く、其下には仙臺、鹽浦、松島、歴々として數ふべし。東に金華あり、南に太平あり、北に富山あり。遠きは則ち栗駒の諸山。雲烟縹緲、出沒隱見す。蓋し天下の壯觀なり。獨り松島に冠たるのみならず。

◎時序

片語云々
只一言も此處の事を説かぬは何故ぞその義。

刻畫云々
すぢを引くが如しこの義。

潜浦攪異

宮戸島の東北、瀕を潜浦と名づく。岩石相連なること七八町一岩毎に大き七八尺、間條あり、木瓜皮に象る。尺度を用ひて刻畫を施す者の如し。知らず造物、何等の戲をなしてか此怪奇を作すかを。若し之を大都に置れば。一百万金にも價すべし。松島誌を著す者、片語及ばざるは、獨何ぞ歟。

巖洞冒險

潜浦より島に沿ひ、益東し。舟大洋に進みしに、風浪益々悪しく。巖石益奇なり。四十八洞の勝あり。鳥脚或は出で。或は入り、曲折轉廻、屏風を立てたるが如し。其下皆然として巖洞を成すもの極めて多し。又石筍あり。海中に抜き

(秋) ○松島の秋

八百二十三

◎時序

舟人悸色
船頭が恐るる
顔つき。

谿笥
開きてこつる
なるさまに云
ふ語。

逡觀
近き眺めの義

(秋) ○松島の秋

八百二十四

んで、天に聳り、空を衝く。忽ち一洞を得たり。之を窺へば
其中甚だ朗かに、旁北海に通ずべし。舟を命じて穿ち過ぐ。
舟人悸色あり。北海笑つて曰く、吾れ嘗て此を過ぐと。乃ち
入る。仰いで見れば、谿笥たる石骨、凹凸して下垂し、勢人
を壓せんと欲す。俯して海底を窺へば、深碧瑠璃の如し。穿
ちて出づれば、又一洞あり。稍窄まる。北海曰く、此れ島背
に達したり、遲疑することなかれど。舟人勇を鼓して進む
果然海風大に起る。命じて帆を揚げしむ。石濱を過ぎ、一馳
して觀月橋下に至りぬ。

富山聚遠

山海の勝、遠望に宜しきものあり、逡觀に妙なるものあり。

◎時序

遠通俯仰
如何にして見
ても。前後左
右遠近の意

暱して
細き目つきし
て。

(秋) ○松島の秋

八百二十五

或は仰いで見て奇となし、或は俯瞰して佳となす。獨松島の
みに、遠通俯仰、一として宜しからざるはなし。島嶼萬千。
分ちて之を視れば各其妙を得、合せて之を望めば、益其奇を
覺ゆ。蓋し富山の如きは、其遠くして合望の宜しきを得たる
者なり。車行松島を距ること二里、一峰鬱蒼として來る、是
を富山となす。石磴百步、佛堂に至る。一望空濶、寒風澤野納
島、烟波遙靄の間に參錯更互す。土人云ふ、富山に登らずば
以て松島を言ふに足らずと。蓋し扇溪、代崎の諸勝は、猶美
人の宜しく暱して之を、愛すべきがごときも。富山は則ち神
韻遙逸、空際にあるが如く、猶天女瑤妃の宜しく敬して之を
崇ぶべきがごとき耳。松島の觀、爰に至つて畢る。

◎時序

小品
短文を云ふ。

宣ふ
言ふことの敬語。

初夜
午後八時を云ふ。

(秋) ○松島の秋

八百二十六

以上は學海翁小品、此度は、橋南溪翁のを録せん。

五月八日、奥州松島見物のために、塩竈の町杉阪といふ所の津國屋和助といへる旅館に宿す、あるじいふは、明日の松島御見物は、幸の御友こそあれ、初より奥の座敷に泊り給ふは禪僧にて四五人連なり。明日は舟かりて、見物せんと宣ふ。同船して見物し給へといふ。それこそは能き連れなれ、旅の僧物語珍らしからんと楽しみ居たるに、奥の座敷僧にも似ず振舞て、高聲に笑ひの、しりけるに、初夜過る頃には、此町の妓婦四五人を召來りて、酒をも肉をも吞食ひ、出家の小唄淨瑠璃さすがにふしつたなく、殊に奥なまりにて聞も苦し。妓女のひける三味線は、薩摩などにある六調子といふに似た

◎時序

のどやかに
心静かに云ふ義。

亂酒放逸
大酒しておほさわざすること。

(秋) ○松島の秋

八百二十七

り、其かまびすさいふもさらなり、亂酒放逸、こなたの座敷までも安からず。扱ても無慚の法師原やどうとましくて、其夜は明ぬるに、いざ船かりて乗らんといふに、彼遊女そのまに携へて、衣かなぐりすて、鉢巻横さまにしまして踊り狂ふにぞ、興さめて此法師らと同船せば、あたら松島の風景もいかでか、のどやかに見るいとまあらん、あらず不祥の法師やと思へば、詞かはすさへ口汚る、やうにて、同船の事はやめたり。それより只二人、塩竈の浦より松島の雄島まで、二里半の所を賃錢纒かに四百文にて、小船一艘を買切漕出す、天氣殊にのどやかにて、風さへ静なるは、天幸を得たりといふべし。東に向うて行くに、岸より纒に五六町の所に小島あり

◎時序
名たる
名に負ふ。な
かだき

繰出す
ぞろ／＼出で
来るこゝ多
くの島の目に入
るを云ひし語

(秋) ○松島の秋

八百二十八

辨天島といふ。夫れより十八町にしてかの名たる籬が島あり
右の方に東宮濱といふ里あり、向ふの沖の切戸の出崎を湯が
崎と云、左の方崎山と云、皆漁家なり。籬が島より左に折て
船の頭北の方に向ふ。東の方に、島々連なれり、大なる島近
く隔りて、其島の切戸より東海を見る。其大なる島より外に
ある島々、我舟の過るに従ふて、北よりして南に移る。小き
切戸より數々の島々を繰出す事、のぞきからくりを見る如く
又芝居杯の引道具をみる如し。其島皆甚大ならずして、色
々の形あり。多くは皆其形を以て島の名とす。地藏島、烏帽
子島等其形尤もよく似たり、其外、
筆捨島、沖の唐戸島、松の島、水島、兩犬島、鍋島、

泉水
庭前に設けた
る池。

◎時序

(秋) ○松島の秋

八百二十九

親船島、屋形島、二子島、鐘かけ島、蛇島、鼓島、大
鼓島、青海島、汐干島、松が浦島、橋かけ島、旗が島
内裡島、后島、都島、二王島、塩焼島、物言島、主水
島、棚島、箕輪島、鏡島、籠島、化粧島、鞍懸島、あ
ぶみ島、貝の島、伊勢島、小町島、毘砂門島、大黒島
夷島、ふくら島、雄島、旭島、翁島、千貫島、經の島
猶此外、船頭色々の島をさして教へしかど、書しるすに船行
過て、四方の景色を見洩さじとするに、心のいとまなくて十
分の一もしるし得ず。八百八島有りと云、誠に數百に餘れり
と思ふ。塩竈の千賀の浦より松島まで二里半の間、泉水の如
く、海亦甚深からず、五六尺或は七八尺計に見えて、底甚

◎時序

艶美
うつくしき

元
支那の王朝の
名明の前の朝

騷人
詩人、文人な
ぎ。

(秋) ◎松島の秋

八百三十

明なり。かくの如く島の間皆入海なれば、風ありといへども
波立事なしといへり。此島々松皆赤色にして、枝皆下に垂れ
作れる松の如し。故に其景色、艶美にして猛からず。舁船を
雄島に付て上り見るに、雄島頗る大なり。此島は見佛禪師の
坐禪の地なり。其堂宇今に残れり、島の南邊に、高さ一丈に
餘れる碑有り、元の僧寧一山鎌倉建長寺に住持せし時、見佛
禪師の爲に書する碑にして、字體は草書なり。苔封じて文字
見がたき所多し。世の人石摺にして珍重する石碑なり。其外
此雄島には芭蕉の、朝な夕な吟をはじめ、俳諧者流の發句
の碑、或は騷人の詩碑等甚多し。然れども、此佳景に對す
べき作は有ぬとも覺えず。舁雄島見めぐりて大なる橋を渡り

◎時序

耕作の地
田畑など耕種
する土地。

遊覧の人
松島見物する
人。

(秋) ◎松島の秋

八百三十一

他の島にのぼり、又其島より橋にて松島に渡る、今松島と名
付る所は陸地にて、町家軒を並べたり、多くは皆旅館なり。
松島の町、耕作の地少ければ農人にもあらず。又此地は瑞巖
寺の下にて、殺生禁制の所なれば漁獵の者にもあらず。他の
街道にあらざれば、商家にもあらず。大かたは只松島の景色
遊覧の人を宿して渡世とする事なり。瑞巖寺は町の西北にあ
り、禪宗は、大地なり。開山は世に名高き眞壁平四郎入道な
り。此松島の町よりは、景色見がたし。景色は只舟行の間な
り。舁兼て仙臺の人のいひしには、松島に遊ぶ人は必ず富山
に登るべし、松島の景は富山に留れりと聞きしによりて又富
山に至る。東北に當りて其道五十町有り、富山と云は、觀音

◎時序

書院
おもてざしき

西湖
支那に在る湖
水にて景色よ
き地

(秋) ○松島の秋 八百三十二
の靈場にて、田村將軍の開山なりと云ふ。高さ十町ばかりも
ありて、此邊にては第一の高山なり。此山の絶頂の南邊に、
富春山大仰寺といふ寺あり。此寺の書院の庭より東南の方を
見れば、松島の全景一望の中に備る。大抵東西二三里に南北
六七里計とも見えて、八百八島連れる風景、繪に書る西湖の
圖に甚似たり。遙に眼をめぐらせば、東洋限りもなく誠に天
下第一の絶景、筆紙に盡すべきにあらず。人によつて松島は
俗景なりと云もあまりに、奇麗にして畫圖の如きゆるにいふ
なるべし。余既に天下をめぐり盡して、名勝の地至らざる所
もなきに、實に此松島の風景に比すべきもの、又他所に見る
事なし。此庭に一生をもたへたき心地すれども千里外の旅の

◎時序

千里云々
故郷遠く離る
と云ふ

是非ともに
きつさ。かな
らずこの義

身、さてあるべきにあらねば、親しき人に別る、心地して、
寺を下り又松島にかへり、松島より陸地を經し、鹽竈の杉阪
に歸る。松島と鹽竈との陸路は、山に隔てられて景色見えず
初思ひしは、舟にて行には海上危くも有べし。殊に景色を
見るには、歩こそ心靜にしてよるべけれど、既に陸路より
松島に遊ばんとせしに、宿の主諫めて松島の景は舟行にあり
陸路よろしからず、まげて我詞に従ひ給へといふにぞ舟買て
遊べり。誠に宿の主のいひし如く、陸路にては景色一つも見
るべからず。其上海上も泉水の如くなれば、いかなる風雨の
時といへども、危き事は有べからず。松島に遊ぶ人は是非ど
もに舟行すべき事なり。又、富山に登るべき事なり。

(秋) ○松島の秋

◎時序

(秋)

○黃菊 白菊

八百三十四

黃菊 白菊

金風
秋の頃に吹く風。秋風のこ。

雪葦黃葩蹄
白き菊黃なる菊。

金風白露、秋も漸く深うなりゆき、靈氣天地に満てるの一夜、み星頻りに零して、清くも咲き出でし菊の花。櫻にまして高尚に、古來隱逸の花と稱せられ、殊に萬木枯れ、小草萎れゆく秋を、凜々しう霜に傲るを愛づ。左には、作例二章を示すべきぞ。

某寺に菊を賞す

常に夢に入りし菊、今日しも友と共に某寺に訪ひぬ。園は甚だ廣からずと雖も、雪葦黃葩東籬を埋め、銀と亂れ黃金と

◎時序

同日に云々
道うて居るさの義。

輪蹄雜沓
車馬の往來しげきを云ふ。

句ふ。我が都下、菊を以て名ある園、曰く何、曰く何、擧げ來れば鮮なからざるも、何れも蹄輪雜沓の境にして、隱逸と評せらる、花に適せず、而も所謂菊人形なるものにして、多く兒女の眼を喜ばしむるのみ。詩人の興を引くに足らず。此寺の、市を距る遠からざるも、竹樹相圍みて一區を成し、曾て紅塵の到るなく、山僧の栽培に秋の色香はこる一叢の菊、多くは自然にまかせて、野趣どりく、市内の園のそれと、固より同日に語るべきに非ず。其破れし垣根を美しく補ふところげに、筆にしがたきの風流、尋常なる植木屋が學び得ざる所、尤も尊し。あ、菊は昔より千代のためしに引かれ、めでたき花なり。申すも畏きことながら、皇室には御紋章に

(秋)

○黃菊 白菊

八百三十五

◎時序

三秋
秋の九十日又
單に秋の義

蠶魚云云
漢書にのみ耽
りがたくてさ
の義

(秋) ○黃菊白菊

八百三十六

用ゐさせ給ふ。殊に厳しき霜に敵して枯れず、また凋みもせ
で、香は三秋に秀で、晩節を誇り、極めて操正しく、花卉中
の四君子の其一に居る、床しからずや菊、世の菊を愛づるも
の、其晩節を慕ひ、或は奇香をよるこび、或は隱逸なるを説
く。知らず僧は、其愛する所以のもの、何れにか在る。之を
他日に聞かんとし、暫く記するに此文を以てしぬ。

菊 見 の 記

打ち續く秋日和の暖かう、菊のうはさとりく、書齋に籠り
て蠶魚に伴ひがたく、野べにと出で立つ。とある農家に過り
しに、花は大輪ならねど、咲き亂れたる秋の色、白きは霜に

◎時序

一雨は一雨
一あめ毎にさ
の義

野生
自然に生ずる
こと

眞金
黄金のこと

まがひ、黄なるは眞金のそれにも似て、野翁は一時の富と誇
るさまの、罪なくしてをかしさ、殊に野生のま、なる、言ひ
知らぬ趣ありて、城中幾多の名園に培はれ、丹誠こめられ
し花より却て氣高く、幾度となく賞めし末には、兩三枝を
の翁に乞ひ得て歸りぬ。

他 卿 の 秋 雨

一雨は一雨より秋深うなりぬ。旅館の燈火影暗うして……
人間の十年、敢て短しと思はねど、西ひがしとさ迷ふうち、
早くも夢と消ね去りしよ。故郷の秋色、今いかに、うきに慣
れし旅枕の、常には花紅葉を描き易きに、今宵はなごて上ら
(秋) ○他卿の秋雨

八百三十七

起きつ寝つ
時の鐘を數ふ
るを云ふ。

◎時序

飄然として
ぶらりさあて
もなく。

千町の小田
廣き田。小は
添字。

(秋) ○秋の野邊 八百三十八
ざる。起るつ寝つ、ねづ起きつ、數へつくす夜半の鐘、雨い
よく細うして繁し。

秋の野邊

近郊の秋訪は、やと、飄然として吾家を出づ。此日や天氣明
かに、千里一點の雲なく、澄みに澄みて水よりも清し。詩打
ち誦しながら石橋の邊に到れば、千町の小田には稔よき稻、
涼しき秋風に吹かれてさらりと、黄金の波を打ち寄するさ
ま、ねも言はれぬ心地よき。彼方の岸には、漸う色づきそめ
し櫺紅葉、夕陽に照されて一しは赤う、いとも艶なる眺めな
り、此方の家の垣根には、狼籍たる一叢の菊とりくに、咲

凜々し
いさまし。お
ごそかなり。

逍遙す
そらあるき
す。ぶらつく

◎時序

き亂れ、他の草木のしをれゆく此頃、朝ごとの霜に堪へて凜
々しきさま、色にも香にもほの見えて貫し。そのほとりに、
鶏の餌をあさるさま、何れ浮世の外の趣、田舎なればこそ
と思ひぬ。

秋の山行

心よく晴れし秋の一日を、杖にまかせて處々に逍遙す。訪ひ
ける水村山郭、眼に映するものは只もみちの錦、さらぬだに
花より紅なるに、夕日に射られては宛ら燃わんばかり、畫
工も寫すに筆なからん。やがて疎鐘のひびき暮山に流れては
秋色漸く淡く、白雲のゆき、愈しげし。

(秋) ○秋の山行

◎時序

風月云々
釣魚に耽る人
この義

蘆花云々
あしの花の白
きを雪に見立
てさの語

(秋)

◎秋江の眺眺 秋山の晚景

八百四十

秋江の晚眺

釣磯寂寞、風月を一竿にたのしむの人なく、暮烟淡く疎鐘ひびき、西山紫に夕陽流れぬ。既にして水村山郭、炊烟あがり、次に燈火ひらめき、夜雲漸く天地を籠めて暗し。折しも一陣の西風吹き来れば、水白く、夜白く、秋白く、蘆花の吹雪に埋れて漁舟も亦白し。

秋山の晚景

心なき白雲も岫にかへらんとて、西より東、東より西へと、ゆきてせはし。吾は亦徐に詩拾ふ歩を移しつ、その料もが

◎時序

不徑斜
二月花
共に杜牧之の
句。故に取
て云ひしなり

夜泊
舟が、りする
ここ

良景
月夜のよきけ
しき

(秋)

◎秋江夜泊の記

八百四十一

秋江夜泊の記

など逍遙しぬ。夕日は山々に照り返して、秋色紅更に紅、石徑斜ならねど、二月の花よりも美しく、坐ろにとまる足の運び、暫く書中に立ちぬ。

澄みわたるみ空に通ふ雁の羽風に、こぼれて墜つるらしき露樹に宿りて玉となり、砂に滴りては夢と消ぬ、聲こそなけれ返らぬ秋のためしに、逝く水には濛々として響きあり。仰いで天、俯しては地、この景、この情、面白しとするは果して世に幾人ぞ。而も一天月明かにして長江水清く、良景は人をして郷愁を忘れしめぬ。

◎時序

(秋)

○永源寺の秋色

八百四十二

永源寺の秋色

譲らず
劣らすとの義

稍名を
漸く其名を。

元應
後醍醐天皇の
御宇

永源寺は紅葉の名所、山水の勝、山城の高尾、攝津の箕面に譲らず。只地の僻なるがため、來り遊ぶもの少なし。雖も、文政中詩人大窪詩佛筆を載せ、次で大塩平八郎水口藩文學中村栗園こ、を訪ひ、稍名を世に馳するに至り、今は雅俗の秋色に酔ふもの多し。寺は近江國愛知郡東小椋村の瑞石山に在り、禪宗臨濟派の本寺たり、寺祖寂室は、元應元年入元す、七年歸朝するや、佐々木氏頼之を崇信し、此地に伽藍を建立す。康安元年入寺す、貞治六年入寂す。年七十八。勅して圓應

◎時序

諡號云々
おくりなを賜
はりさなり。

懿旨
意旨の敬稱お
ぼしめし。

唐賢
唐代の人を敬
して云ひし語

(秋)

○永源寺の秋色

八百四十三

國師の諡號を賜ふ。其法弟に松嶺、異仲、彌天、越溪の四人ありき。之を四派と云ひ、相繼で住職となる。明應四年勅して、本寺を鎌倉圓覺寺の上に班せしめらる。のち後奈良帝の時に至り、嵯峨天龍寺に準せしめらる。寛永中には、東福門院の懿旨により、井伊侯を以て當寺の外護に充てられたる如き、古來濟家無比の名刹。既にして境内に入れば、前にも山、右も亦山、溪より流れ來る水は、即ち左より右して愛知川に合す。橋あり、山と岸との間に架る。此ほどり楓最も多く、眺め殊によし。唐賢の句に、紅葉青山水急流とあるを思ひ出で、此處の爲に歌ひ出でしに非ざるかを疑ひぬ。橋打ち渡れば阪なり、仰いで左を見

◎時序

名利云々
有名なる寺程
ありて其評判
に違はぬこと
なり。

疎鐘隱々
遠くひびく鐘
の聲がゴーン

(秋) ○永源寺の秋色

八百四十四

れば、十六羅漢あり。俯して右見たるせば、岸高うして其下には清き水、水流る。羅漢阪とは此處。更に行くと數町、山門厳しく簷ゆ。門内には本堂、經藏、觀音堂等數多の堂舎高低と並びたち、流石に名利たるを辱しめず。甘露水あり、試みに掬すれば芳冽齒根に徹す。

頃しも晩秋、此處かしこ、霜に染めなされし紅葉、或は濃く或は淡く、其密なる處は燃ゆるが如く、其疎なる處は松や杉の翠に映じ、白雲また趣を添ふ。夕日に照りかへされては、一しほ色まして麗しく、山風吹き來れば千片の錦を雨ふらす、景よ情よ、書くだに筆なし。暫く寺内に憩ひ、再び羅漢阪の橋に立てば、暮色蒼然として紅葉辨じ難く、疎鐘隱

◎時序

著稱
世にもてはや
さるること

交
さかひめ。

々として白雲流れぬ。

附記す。中村栗園の遊記は、嘉永年間に物せるもの、原漢文なるを、例により和譯して左に録す。

楓の世に著稱せらるる者、京の東福寺、江戸の海晏寺是なり。二寺は都會に在るを以て、天下の人、皆耳聞して目覩す。永源寺に至りては、則ち寂然として之を言ふもの莫し。其或は之を言ふ、近江一國の人に過ぎざるのみ。故を以て、其名未だ世に稱せられず。余嘗て秋冬の交を以て、楓を二寺に觀たり。而して永源寺は、則ち未だし。今茲十月十六日、天暖かにして春の如し。乃ち策を修めて出でぬ。鳥井平中野々杉柵を經、二股嶺を踰り、山上村に抵り、右折崖に沿うて行く。

(秋) ○永源寺の秋色

八百四十五

◎時序

一堆の云々
紅葉の寺塔を
隠すを見るこ
なり。

赤鯉以下
紅葉の水に點
する形容。

(秋) ◎永源寺の秋色

八百四十六

遙かに一堆の繡雲、塔尖に横抹するを見る。曰く、豈に是れ
楓なる乎と。橋を踏む、寺に至る、一老僧あり、烏巾鳩杖、
前岸を指し余に謂つて曰く、楓を観る彼に非ざれば則ち不可
なりと。因りて寺を出で、岸に登れば、水を隔て、一林皆赤
し、之を視れば即ち楓なり。而して其幾千章なるを知るべか
らず。時に夕日、林と相映射し。粲爛閃灼、凡そ橋梁門樓よ
り、以て山骨土毛に至るまで、一として赤ならざるは莫し。
而して吾の野服草鞋、是に於てか亦錦衣珠履となりぬ。少焉
にして、風起り林鳴り、楓葉繽紛として水に墜つ。其沓蹙し
て聚るものは、赤鯉の隊を結ぶが如く、離披して散ずるもの
は、金魚の行を亂すが如く、水色赫々、波光艶々、宛も火布

◎時序

二寺
東福寺と海晏
寺とを云ふ。

窮壤奥區
かのあなかと
の義。

韵士墨客
風流人のこと

(秋) ◎永源寺の秋色

八百四十七

を舗き、錦字を織るが如く然り。嗚呼、其奇麗の觀、春花と
雖も、殆ど及ぶべからざるなり。況や、二寺の楓に於てをや
然り而して、其名未だ世に顯れざるは、蓋し其窮壤奥區に在
るを以ての故なり。然らば則ち是れ楓の不幸なる歟。曰く幸
なり、不幸に非ざるなり。何となれば、則ち今は楓寂寞の山
に生じ、清瑩の水に臨み、俗士婦女の來りて相斬伐する者有
る莫し。此れ天是楓を此に生じて、而して能く其自然を全う
せしむ。豈に幸にあらずや。然りと雖も、語に云へらく、諸
を内に有れば、必ず諸を外に見ると。則ち後來是楓の名、顯
然世に著れ、而して韵士墨客の千里を遠しとせずして、來り
賞するや必せり。亦猶人の學徳内に積んで、而して文章外に

時◎序

猶錦雲云々
歸後もまだ紅
葉の美しき山
の中にあるが
ごさしこの義

征衣
旅衣云ふに
同じ

(秋) ○秋江小景

八百四十八

煥發し、四方の學者。争うて其門に踵るがごとし。但楓は則ち其名の世に顯る、を願はざるのみ。家に還り筆を援りて之を記す。猶繡雲の中に在るがごとし。

秋江小景

淋しき河岸に立てる殘柳、春の夢くりかへす力も衰へ。別離の恨を結びし枝もそのまゝに、夕暮の烟を帯びては殊にあはれに、そが邊の渡には、繋ぎすてられし小舟の横り、人の影さへ見えず、白鷺寒げに立つ。折から颯と吹き來る川風に亂れに亂れ散る蘆の花、雪よりも白く、そゞろ征衣のうすきを感じぬ。

宜しき候
よき時節

小杜
杜牧之のこ
り。即ち杜
月。紅葉は二
紅なりと歌ひ
し詩人。

◎時序

(秋)

○秋の旅

八百四十九

秋の旅

秋は天高うして氣清く、最も旅に宜しき候、錦ひきはゆる紅葉に、小杜を學びて車停むる興深く、西樓の月に郷愁照らさする、亦情趣淺からず。旗亭の雨に友したはしく、雁の聲や蟲の音に、さては砧の響きに、神しぼる事多かるべけれど、而も皆是れ詩歌の料、憐れむべきもののみなり。余が所謂秋の旅、千里の遊子となりしには非ず、日ごろ夢に預けたきし、名所の紅葉狩、忙中の閑を偷みて實にし、草々に書き流したるが是れ。讀まん人は必ず其心してよ。

◎時序

(秋)

○秋の旅

八百五十

箕面山

雅俗
風流人も俗人もこの義。

灌莽
小さき草木いばらやさげ。

箕面は、大阪市の北六里許、紅葉と瀧とに名高く、文士の筆に上ること數知らず、殊に近年電鐵開通してより春夏にかけて雅俗を引き、新に設けられたる動物園は日に幾千百の兒童を呼ぶ、何れも山のにぎはひ、到る處に樓閣築かれ、亭臺建てられ、酌むにも憇ふにも宿るにも、何一つ不自由なき別天地、昔は灌莽を分けて訪ひしと云ふ瀧のもとまで、路開かれて三四間たきに建設せらる、電燈、夜も尙町を徘徊するの想すべく、今は釣瓶落してふ秋の日を懸念すべくも有らず、殊更に歸り後れ、夜の

◎時序

輕装
身がるなるいでたち。

新設
新規に設立するところ。

乗初
はじめ乗ること。

(秋)

○秋の旅

八百五十一

車中瞥見

秋色に憧る、もよく、瀧に月影碎くるの奇景眺むるも宜し、吾は机上の資料に盡きはて、且つ日来夢に入りし名所なればと、思ひたちしを吉日に、いざと計に輕装し、人は遣ると取るとに忙はしき十月の三十一日、風流の旅路に就きぬ。さすがに、遊びたしと思ひし箕面、天下に名高き紅葉と瀧、さては新設の動物園、如何に吾筆を迎へて、日記帳を黒うするかと嬉し。

電燈の消ゆるを會圖に起きし吾れ、元氣呼ぶべく酌む酒に聊か時刻後らし、八時五十分と云ふに梅田を出づ。初乗の電車

◎時序

紫の花
萩さして云ひ
し語。

殘月樹梢云
々一句
曉の景色を云

四天王寺
天王寺を云ふ

(秋) ○秋の旅

八百五十二

心地よく、間もなく北野停留場なり。
俗に萩の寺と呼ぶ東光院は、北二町の處、西風吹き老いし
今日は、苔蒸す庭を蔽ふ紫の花、瓢さげて訪ふも甲斐な
かるべきも、初秋の細雨に裳ぬらし、詩の杖引くには興多
き處ぞや。寺には、薬師如來をまつり、外に小野篁の刻
みしと云ふ、顎なし地藏尊もあるぞかし。
朝妻と云ふ旗亭は、萩の寺の南隣なり、萩も多けれど名
高きは蓮花なり、樹梢に隠れ、曉雲池上に流る、の時
來りて小亭、卯飲試みれば、秋氣衣に返りて舟に在るより
も涼し、こは又八月の末つ方ぞよき。
大日寺は、萩の寺より直に小石橋を渡りて右に訪ふべし。

◎時序

遺髪
かた見のかみ
の毛。

弘通
教法を遍く廣
むるこそ。

素練
秋の川のたさ
へ。

平楚
平野のこそ平
蕪。

(秋) ○秋の旅

八百五十三

此處醍醐の昔、四天王寺と共に南北の大伽藍と稱せられた
るも、今は僅かに荒れたる堂あるのみ、世の變遷を偲ばん
となら、時を嫌はずして歩を枉ぐべきぞ。
尚、北しては導通寺、此に業平の像あり。むかし業平朝臣
の乳母某女、その遺髪を朝臣の木像に植ゑて祀れると傳へ
髮結の神と云ひ、參詣の婦女多し。
源光寺は、これ亦程近き處なり。當山は淨土宗、天平勝寶
年間の草創、のち大原の良忍上人融通念佛宗を弘通し、當
寺を再興して一派の本山とす。本尊は阿彌陀如來の畫像、
境内には詠歌堂、子守勝手社あり、古は賽者陸續として
香烟絶わざりしかど、今は寂びたり。

◎時序

踏青
つみぐさ。野
べあそび。

撲螢
はたるがり。

收容所
受け入るゝこころ。

(秋) 〇秋の旅

八百五十四

次の停留場は新淀川なり。眺望好きは此處、一帯の長江東より來り、秋水澄みて素練を平楚の末に送る。此處の堤、春の踏青によく、夏の撲螢によく、また納涼によし。東には信貴、生駒の連山うねくと、北には箕面、五月、西へかけては六甲の諸峰巒、淡く白雲を棚引し、南へ延びては天に接して見えず、鐵橋を過ぐれば、

十三停留場なり。

有名なる十三、餅焼茶屋は、停留場と軒を並ぶ、むかしは橋の手前にありて古風なる草屋、包も竹の皮なりしも、今は折箱とかはりて床しからず。

修徳館 博愛社は、北四町の處、いづれも世に不幸なる孤

◎時序

菩提所
香火院のこころ
欺かれて
だまされて。

西風
秋吹く風のこころ

免の收容所なり。

崇禎寺は東十町なり。曹洞宗にして亭隣和尚の開基、將軍足利義教の菩提所として、嘉吉二年細川持賢の草創、竹林相圍みて紅塵を遮斷し、清風明月を延く幽靜の境なり。寺門は所謂崇禎寺馬場、正徳年間、和州郡山の藩士遠城重次安藤光乗の兄弟、其仇生田傳八郎に欺かれて返討に遇ひし處、二人の墓は境内に在り。之を寺門を入りて左に訪ふべし、二基の墓石苔蒸して哀れ深し。寺は其遺物を藏す、請は、寺僧之を見ず、心あらん人は、刀、手裡劍、鎖帷子等に昔を偲べや。

村家まばらに、洒布の西風に颯るを左に眺め、やがて着きし

(秋) 〇秋の旅

八百五十五

◎時序

煤烟
石炭をたくけ
ぶり。

森々
樹木の茂りて
こづけきさま

崇敬
あがり尊ぶこ
こ。

(秋) ○秋の旅

八百五十六

は三國なり。

清流は三國川、一に神市川とも云ふ。此處、箕面有馬電車の發電所、宏大なる煉瓦造の建築物は即ち是、南は大阪の煤烟を望めば、北には曾根岡山の高阜人を迎へ、川には白帆上下し、うた、田園生活の好きを想はしむ。

左右は萬頃の耕地、稔りし稻は首低れて村は豊年、風吹かば黄金の波打ち寄せんも、今日は微風だになき菊日和、四山烟りて春よりも麗かに、時ありてか松林を見、時ありてか人家の垣根に沿ひ、忽ちにして服部停留場。

服部天神は東半町の處、能勢街道の傍に鎮し、境内は稍廣くして高燥、樹木森々として茂る。此神、何の故たるを知

◎時序

無絃の琴
松風のおさを
云ふ。

高臺
たかみ小高き
地。

(秋) ○秋の旅

八百五十七

らざれども、男女藝人の崇敬深く、大阪なごより此に賽するもの多く、社前は茶棚、酒亭、旅舎軒を聯ぬ。住吉神社は東一町の處、天竺川に沿ふ一帶の松、雨に烟れば墨繪の如く、風度れば無絃の琴を奏で、四時の幽趣掬すべく、馬場先よりの眺め最も好し。

蘆田ヶ池 周回十町餘、澄みわたる秋の水鏡よりも明かに空高う輪を描き舞ふ鳶の影映るも、心ゆくばかりの今日の景なれど、東風緩う吹き細雨絲を下す春、釣する人の事も思はれ、夏の螢狩、さては冬の雪見の興も如何に深かるべ

くや、電車のあし軽く曾根の高臺に上れば、附近の山々は遠近によりて淡濃を分ち、村の人家は田野の間に點綴し、

◎時序

宏壯
廣くして立派
なること。

若菜
春の初めにも
ほそめし。

(秋) ○秋の旅

八百五十八

身は坐したる儘に書中を行く。

服部天神より曾根の高臺にかけ、算し來れば約四萬八千坪の地、みな是れ箕面有馬電鐵會社の所有にして、田園生活希望者に、貸さん爲の用意とぞ。尙、附近には原田城址、正法寺正子塚などあり、やがて、岡町停留場。

岡町は豊中村の大字、町と名のつく甲斐にや、停留場の前には、豊能郡の誇りとする岡町公會堂あり。日本風の建築にして宏壯、平家建なり。附近には、會社の經營に係る貸家軒を並べ、西洋洗濯屋さへあり、後年の繁華想ふべく、現に大阪以北第一の人烟しげき處ぞ。

原田神社は停留場の前に鎮す。祭神は日の神、月の神、櫛

◎時序

聖壽の無窮
天子の御年の
限りなきこと

衣手
そでのこと。

盛装
立派に着飾る
こと。

(秋) ○秋の旅

八百五十九

玉の命、稲田媛なり。若菜祭と云ふは、正月七日に行はる氏子の乙女、袖ふりはへて野邊に若菜を摘み、翌八日に之を神前に供へ、以て聖壽の無窮と各自の長壽を禱るもの古歌の

君が爲春の野に出で若菜摘む我衣手に雪は降りつ、と詠みしは、此處の事にあらずとするも、情趣相似たらずや。古は祭例に、鹿の頭を造りて之を被り、臥舞起舞と名づくる演戲をなしぬ。南都春日神社より神使として、鹿の來りたる摸りたるものとか聞く。彼是れ想ひ合はさる。又新年祭は、二月二十日に行はれ、稚兒盛装してねりゆく其式古雅なりと云ふ。

◎時序

佛閣云々
寺院を造營せ
させられしと
云ふこと。

界限
附近と云ふに
同じ。

(秋) ○秋の 旅

八百六十

寶珠寺は東十二町、熊野田に在り。昔、花山法皇、佛眼上人を導者として、觀音三十三所の靈場を順禮し給ひ、後更に上人をして畿内の靈地を撰び、熊野山に擬し佛閣を營ましめ給ひぬ。當山は即ち是、故に山號を熊野代山と呼び、地を熊野代と稱へしが、中世訛りて熊野田と書し、今は讀みてクマノタとするに至れり。本尊は、行基僧正作の觀世音、境内には、花山法皇、佛眼上人の塔あり。共に石浮圖にして古色蒼然たり。

佛眼寺は寶珠寺の奥の院なり。年久しく荒廢に委したるを寶曆年中、浪華の人規矩某、官慶和尚を聘して之を再興し昔の山號佛眼山を改め、熊耳山とせり。堂宇莊嚴、頗る觀

◎時序

眉を云々
山に近くして
樹色目に入る
を云ふ。

盤蟠
わたかまるこ
こ。

(秋) ○秋の 旅

八百六十一

るべく、界限に於ける巨利の一とすべし。

次は蜚ヶ池停留場、左に田野開け、行手には箕面の連山漸う近し。

切通新道と云ふは、麻田山、蜚ヶ池を抱いて西に延ぶる處の道、近年の開鑿に係り、山色眉を染めて眺めよし。凡そ岡町より新免麻田山にかけ、みな是れ會社の所有地、面積約十二萬七千坪、貸地が最大の目的なるべし。

次は石橋停留場、線路左右に岐る。左すれば池田、花屋敷、山本、中山、渡荒神等を経て寶塚に達すべく、右すれば瀨川を過ぎ、直に箕面なり。

千里山は東三町とす。一に寐山と呼ばれ、熊野田の上方に

◎時序

(秋) ○秋の旅

八百六十二

絶勝
すぐれたるけしき。

賽者
さんげい人。

稀有の岩窟
世にまれなる岩屋。

起り、脈絡盤蟠三里餘に亘り、三島郡に接す。待兼、島熊
邂逅の諸山は有名にして、みな此山脉中に屬し、待兼、邇
近の二山は玉阪部落に聳れた古歌多く、島熊山は熊野田の
北に聳れ、一名を鬼ヶ嶽と云ひ、山中には怪岩奇石峙ちて
絶勝をなすとぞ。

春日神社と櫻井の清水は共に東十八町の處、神社は木立茂
れる丘陵に鎮し、社殿は神々し。社背には躑躅多く、初夏
の眺めによく、花時には賽者殊に多し。境内に靈水あり、
薬師清水と云ふ、側に老櫻ありしが故、一に櫻井の清水
と稱せられしも、今は名にのみ残りて名木は枯れて無し。
鉢塚と釋迦院は共に北十二町に在り。鉢塚とは稀有の奇窟

◎時序

凱旋の時
かちいくさして歸朝し給ひし折。

勝敗を云々
まげかちをうらなひしこなり。

(秋)

○秋の旅

八百六十三

燭して入れば、正面に石塔あり。高さ一丈五尺、左右には
七尺の不動明王と六尺の地藏菩薩あり。初めて探勝の客は
打ち疊める巨岩大石に驚くべきぞ。釋迦院の寶物なる釋迦
の佛舍利は、神功皇后百濟より、凱旋の時、もたらし給へ
るもの。行基僧正、鉢塚に藏めありしを取出し、精舎を建
つ今の釋迦院は即ち是なりとぞ。

電車は右して程もなく、瀬川停留場。
辨慶鏡水は南五町に在り、昔は周回五十餘間の池塘なりし
と傳ふるも、今は八間許の水溜、壽永の頃、義經の平氏追
討として進發の際、己が姿を池水にうつし、軍の勝敗を卜
せしと云ふ辨慶が名残なり。附近には七角井、化粧井、龍

◎時序

鎬を削り
きり結ぶこと
合戦すること

兵家云々
兵法家の勝負
な争ふ地との
義

(秋) ○秋の旅

八百六十四

ケ井、柳ケ井等の池井處々に在り。
瀨川の古戦場は處二町なり。元弘三年には、赤松圓心六波羅軍と鎬を削り、建武三年には、新田義貞、京都に敗れし足利尊氏を追撃し、直義と鋒を交へし處、地は今井川原と云ひ、箕面川に沿ひ、北には山を控へ、西と南は打ち開け兵家必争の形勢と知らる。
次は最後の箕面停留場、右に公會堂あり。廣き庭園は運動場にして、前日より開かれし山林こども博覽會は、期限過ぎしも尙その儘に、旗の颯るあたりには、樂隊の囀にぎやかなりいざ書かん、箕面山の秋色を。

箕面公園

◎時序

彌生
三月の異稱
晩春

河鹿
清き音して鳴
く一種の蛙

(秋) ○秋の旅

八百六十五

箕面公園とは、箕面山全體の稱、秋の紅葉は云ふまでもなく、掌大の地なれども梅林あり、櫻も亦なきに非ざれば、鶯鳴きそむる、二月より彌生の空にかけ、静けき春を訪ふに似しく、紅塵に汚れし目は、來りて初夏の新緑に洗ふべく、若し夫れ三伏の頃ともならば、汽罐の底にも等しき城中を逃れ、瀧の音に身を涼しうするも、石に枕し流れに口す、ぎ、暑忘る、も宜しく、僧院に茶を煮て碁を圍むも、また曉に杜鵑聞くも、酒樓の月に坐して河鹿の清き音着に、酌むも興多かるべし。
山中の勝を語らば、先づ新設の動物園、瀧安寺は八町にして、瀧へは半路餘、其奥に雄瀧を探り、山の裏手の勝

◎時序

(秋)

○秋の旅

八百六十六

尾寺へは、瀧より一里許ぞや。尙、精しくは北半町に西江庵、同じく十三町に石澄の瀧、東十町に醫王岩、同じく二十町には、忠臣藏にて名高き早野勘平事、萱野三平の墓あり。唐人戻岩や其他は、之を本項に盡すべし。

動物園

標石
目じるしの立石。

制の
つくりの。結構の。

停留場より小店を左右にして上れば、右に標石あり、萱野三平の墓へは、此處よりすべしと教へしかど、二十町と云ふ路に聊か當惑して、尙も本道上れば左に蓬萊橋あり、高欄擬寶珠製の朱塗、其下は清溪の水淙々として玉を碎き、流る、末には石壁高く聳ね、樹は之が髪となり苔は衣となり、葉は未

樓觀
二階建の門觀

一周
ひさめぐりするこま。

◎時序

(秋)

○秋の旅

八百六十七

だ紅葉せず。水は其裾を洗うて左し、岩上には旗ひらくと吾を招くに似たり、富貴岩の在る所とは後にて知られき。橋を渡れば樓觀あり、是ぞ不老門なり。門の位置は、突出したる小丘の下、右なる路は園内を一周して下り來るもの。左して行く。先づ目に入りしが右手の虎、左手の土堤下には駱駝あり、瘦せたる様、毛に艶なき様、いと見苦し。路は曲折して萩多けれど、今は秋寂びて花なし。やがて得しは松尾橋、右の崖下には棧道通じ、上手には水車相生橋、尉ヶ瀧、櫻茶屋あり。附近にはライオン、狸々、小鳥等、一々記すべくもあらず。左して橋渡れば、水晶塔と云ふがあり、塔形の硝子張、中に金魚を放ちて噴水いさましく

◎時序

宛然たる
似たるこそこの
形容。

萬里の云々
秦の始皇が築
きし萬里の長
城に似たるも
の故に模倣即
ち雛形と云ふ
るなり。

(秋) ○秋の 旅 八百六十八

騰る。上方は即ち富貴岩、其下は例の石壁、再び橋上の人ど
なれば、宛然たる深溪に臨むの想ひし、水は箕面川に注いで
南に去り、幾多の樓臺は畫中の物とも評すべくや。
水晶塔より右し、昆蟲室を通りぬけ、前の棧道と平行して進
み、左折すれば半町許にして塀あり、萬里の長城の模倣と
も見るべし。上ること數歩、園内に於ける西南端の高處にし
て富貴岩あり、海拔六五四呎としるさる。見渡せば、東西
に連なる山々は、南に走るに隨うて距離いよゝく遠く、中央
は幾千萬頃の耕地にて、黄雲の滿地に布くは、稔りし稻のそ
れなるべく、處々に點綴する部落に小丘の木立、目の盡くる
はては、大阪より西宮の附近にして、彼處は海よと想像さる

◎時序

指點され
指にてさし示
さるゝと云ふ
ことなり。

寸馬豆人
畫法の語故に
人は云々の一
句あるなり。

(秋) ○秋の 旅 八百六十九

れど、晴れし今日の日和を、沖行く白帆は薄紫の靄に遮ら
れて見えず。眼下は石橋の停留場、箕面の停留場、一々指點
され、公會堂の運動場に奏づる樂は、手に取る如くに聞え、
人は豆よりも小さく、寸ばかりの馬なきも憐れ畫中の景ぞや
すぐ下には兩三軒見ね、園の區域にや高低の地に從ひ長く築
かれたる塀、全く萬里の長城を實にしぬ。岩の西北に池あり
其西岸より山麓を南にかけ、新道の開拓中なるは、是も亦園
に景氣を添へん爲の新經營なるべき乎。
歩を返して左手の路を進めば、若木の櫻の盡くる處、谷と小
松をこめ、大なる網籠あり、千羽鶴と云ふが此處、籠の中に
は池も丘もあり。鶴は名の如く流石に多く、鷺や其他の小鳥

◎時序

自然のまゝ、
天然のまゝ、
の義。

放つ
飼養してある
を云ふ。

添物とする
演藝の場所。

(秋) ○秋の 旅

八百七十

も群をなし、雉子は美しき毛を半ば枯れし草の中に光らすなご、げに自然のまゝなり。籠に沿うて下れば、陸禽、山椒魚火喰鳥あり。東すれば相生橋、其上に尉ヶ瀧、下に水車ありて、橋詰にては棧道を経し別路と合し、上れば翠香殿にして上手に千疋猿の檻あり。前の路を尙も進めば藤棚あり、やがて渡るが高砂橋、二間許の處より水落ち、潭とも云ふべき池には龜と鯉を放つ。橋下は水注いで半町餘の處にて、例の尉ヶ瀧となる。少し進めば下手に翠香殿あり、土曜と日曜、又は事ある毎に奏する餘興場、山に面して建てられ、遊人の數多は小高き地の勾配に従うて立ちつ腰をかけつ、見るべく聞くべく造られあり。

◎時序

鸚鵡、鳩灌
共に人語を學
び得る小鳥の
名。

餘流
あまりの水。

(秋) ○秋の 旅

八百七十一

北に上れば千疋猿に鹿、少し上の一段高き地は、園内に利用する水源地、一言に評すれば園内に於ける谷頭、幾多の亭に引ける水は皆此處よりするにて、餘流は松尾橋下に注ぐと知るべし。洗面室と化粧室との前を過ぎ、少し左に上れば又も千疋猿の檻、次に鸚鵡あり。時しも『オハヤウ』『オハイリヤス』との呼聲聞ゆ。はてなど見廻せば又聞ゆ。『オカアサン』との聲聞くに呼び、さては鸚鵡めかと心つけば然にはあらで、上手に飼へる數多の小鳥の中なる、一に秦吉了と呼ぶ鳩灌なりき。吾れながら我が愚かさを笑ひ、行手に馳せ上れば此處を園内最高の地、正しく不老門の上方に當る。見晴しは、富貴岩の

◎時序

仁丹閣
賣藥仁丹の建
物。

百聞云々
度々に聞より
も一目見るに
ました事なし
との義。

(秋) ○秋の旅

八百七十二

地と大差なけれど、眺めは確かに廣し。中央には仁丹閣西端には茶店、東には一小酒亭、最端には空中廻轉車あり。停留場より、何車やらんと望まる、は是ぞ。

もこの路を再びすれば、北に稻荷社あり、朱塗の反橋は即ち稻荷橋、阪路と石段とかはるゝ下り、鷺や熊を見つ、終には不老門に出づ。蓬萊橋を渡り返せば、正面に入園券を賣るがあり、行くさには右に當るぞや。

この動物園、山林こども博覽會の第二會場に充てられたるにて、大阪市各學校生徒の製作品、到る處にありしかど、何とて一々評し得べき。園に於けるものとても、百に對する十が程の記とも云ふべき余が筆、百聞一見に

如かずの譬、而も來て訪ふの價値は餘りあり。只兒たち連れて此園に遊ぶ人は、秋の日暮れ易かるべくや。便所は注意ゆき届き、數多ければ、誰にも便利よし。

瀧安寺と飛泉

蓬萊橋より、酒樓や旅舎や、名物などを翫ぐ小店を左右にして進めば、溪架する一の橋あり。既に此に來れば水清く岩奇に、楓樹漸く多く、風渡ればさらりと響きて晝も尙靜かに、少しく寒さを覺ゆ。谷に入りたればなるべし。程もなく梅園あり。掌大の地に過ぎざれども、横斜疎影、浮動する暗香を偲ばしむ。進めば土橋二つ架る。本道は左の山下に通じ

水清く云々
地の漸く谷に
近づきしを云
ふ。

掌大の地
手の平のふさ
さの地。

◎時序

(秋) ○秋の旅

七百七十三

◎時序

千草
千本さ云ふこ

嵐氣云々
山の氣人の身
に泌むを云ふ

(秋) ○秋 の 旅

七百七十四

て半月形をなし、崖上にも溪畔にも楓多し。惜むらくは葉未だ紅ならず、詩興浮ぶ由もなく、徒らに歩を移して橋を二つ縦にして一直線に右に見て過ぐ。見上ぐれば右手には千草の楓あれど、霜淺うして青女未だ錦を織成さず、いよ／＼來しことの早きを悔ゆ。其下に「せ、らぎ亭」あり、浮水潺緩として秋を呷き、楓樹數知らず天を蔽ひ、嵐氣靡々として衣を撲つの境、路より一段低く、溪水の上に床低う築かる、こは大阪時事新報社の建設に係れる無料の休憩所、廣さは八十疊敷もあるべき乎。暫く進めば谷開けて日氣暖かに、幾多の旗亭ある左に瀧安寺の山門を仰ぐ。今まで進み來し路は、尙行きに通ずるも其奥

◎時序

露霜云々
風雨にさらさるゝを云ふ。

修道験
從小角の開創
せる一種の教法。

(秋) ○秋 の 旅

八百七十五

を窮めず、左折して山門を潜りぬ。寺は白雉年間、役小角の草創する所、天台修験道を修め、京都の聖護院に屬す。本堂には辨財天を安置し、本地堂には如意輪觀世音を安置し、行者堂には小角の像を安置す。辨天は小角の作、江州の竹生島相州の江之島、藝州嚴島の三辨天と共に、日本の四辨天と稱せられて名高し。觀音は智證大師の作にして、小角の像は小角自身に刻みしものなり。三堂共に多くの年月を露霜に打たれ、寂びたる程にいや貴し。門内は地廣くして溪畔には楓多く、其二株紅葉するがあり初めて秋に遇ひし心地す。樹下には茶棚にして酒を賣るが多く、赤ゲツト掛けたるさま賤しけれど、櫻の名所のそれに比

◎時序

隱見
見わがくれす
るこそ。

是乎
是れだらうか
この義。乎は
疑問の詞。

(秋) ○秋 の 旅

八百七十六

すれば、俗ならずして且つ静けし。清溪の上なるは岩本坊、青楓の間に隠見す、二の橋渡りて訪はるべかりしも、用なれば堂の側を北し、左に十七八級の石階を攀ち、行者堂を通りぬけて又もや谷に入る。溪畔には例によりて旗亭あり。落合橋あり、細流西の谷よりし箕面川に注ぐ所に架る。或地圖に、前後鬼橋と記するは是乎。やがて醉石亭、續きて箕水亭あり。せ、らぎ亭と共に時事新報社の建設ぞ。此邊境幽に水わきて清く、楓も亦多し。對岸の山腹には、木間に通ずる小路あり、道行く樵者に訪へば、茸狩に辿るものと答へしかど、唐人戾岩を過ぎて得し橋の向ふへ、其路出で來りて本堂に合す。瀧安寺門前にて其奥を窮めざりしもの、支線なるべ

◎時序

幽邃の地
奥深して静かなる地。

軒楹云々
俗なる家と相隣りせず詩會など風流の宴を開くに宜しき云ふこと。

(秋) ○秋 の 旅

八百七十七

き乎。今まで來し路を上れば爪先立つべき阪、橋渡りて溪を左にして進めば路平かなり、此二路、瀧の下にて相合すと聞きたる儘、橋を渡れば鐘ヶ淵にして、時事新報社の沈鐘亭あり。前後の四亭、何れも幽邃の地を擇びて立てられ、他の酒樓茶閣、旅舎等と軒楹を接せず。詩陣を布くに宜し。沈鐘亭附近、楓多からざれども、對岸の山手のを仰ぐに宜しく、橋渡らずして阪路よりするものは、谷を脚下にするのみにして、此處よりの景を観る能はず。歸路は必ず此處にせよ瀧の下より勝尾寺に詣で、茨木に出で、大阪に歸らん人は、亦必ず橋を渡りて此處よりして瀧に達すべきぞ。少し上れば一旗亭あり、今日初めて菊を見る、花は黄にして小さく見る

◎時序

重陽
九月九日の素
の節句。

七彩を現す
太陽の光りに
映じて七色を
美しくあらは
す。

榻供へ云々
腰掛の用意し
てあること。

(秋) ○秋の旅

八百七十八

に足らねど、見るからに捨てがたき風情。日をくれば重陽後
二日に當る。瀧は未だ遠かるべき乎、近くは晴天の雷聲聞く
べきにと進めば、忽ち眼前に見ゆる岩頭の素練、是れかと頷
かれたり。

瀧の高さは十一丈許、幅三間もあるべき乎、廣き絶壁の右
端に懸り、落口よりは水涌きて玉を跳らし、潭近き處にて岩
に觸れ、四散の飛沫に眞晝の日光放射して七彩を現す。楓は
枝をさし伸べて飛泉に臨めど、紅葉せざれば奇觀なし。潭は
廣けれども水淺く、鬼氣人に逼るの概なく、音も亦大ならず
して人語を奪はず。只淙々として響くのみなり。瀑前には廣
場あり、數多の榻供へあれば腰たろして眺むべく、衣を濕さ

◎時序

満山錦繡
山一杯のみみ

想像
それと想ひや
ること。

下物
酒のさかな。

ぬ程の飛沫、霧よりも細きが目に見ゆ。側に橋あり、彼の
一路の相會する處ぞや。此方より橋渡り、右を攀づれば小高
き處に亭あり、瀧を斜に見る。觀瀑亭とも名づくべくや。橋
畔の酒棚にて微酔を買ふ、酒は伊丹にて馴染の白雪、下物は
鯉、その稍泥臭きは嬉しからざりき。
凡そ一の橋より瀧に至るまで、概して水清く楓多く、幾夜の
後の霜に染め成されし紅葉、それと想像されぬにあらざれど
も、秋淺うして満山錦繡を曝する景に接せず。途上にて詩興
涌かぬは遺憾なりき。辿る谷窮りて山なきかと疑へば、一山
は面に當りて水は思はぬ方より注ぎ、左に右に折れに折れ、
漸く得し瀧の雄大ならざりしも遺憾なりき。抱石、わかめ岩

(秋) ○秋の旅

八百七十九

◎時序

遺憾
口をしがらるゝ
こゝの残念。

中旬
月の十日より
二十日までの
稱

(秋) ○秋 の 旅

八百八十

しげのこば、鶴島、蓑かけ岩など、勝尾寺へ行く身の見落し
ては、今に至り臍を噛むも及ばず。途上の對岸する路筋、す
べて東側に、汐見岡、ツ、シ岩、天狗鼻、猿すべり等を訪は
ざりしも亦遺憾なりしよ。さるを何とて、石澄の瀧や醫王岩
に歩を返すを得べき。瀧をして雄大ならしむるは、吾れ神に
あらざれば出来ずとも、満山燃ゆるが如き紅葉と、訪ひ漏し
たる勝ごもは、十一月の中旬に暇あらば再遊して筆に上すべ
く期し、今まで酌みし酒棚の傍より、勝尾寺路へと就く。

瀧の落口と雄濕

濕を後にして阪路に就き、左折一町餘、岩くりぬきし一間半

水鼓怒し
水が激して聲
する形容。

髣髴
さも似たり。

奇觀
くしき眺めと
の義。

◎時序

(秋) ○秋 の 旅

八百八十一

許の隧道あり、恰も瀧の右肩に當り。少し下れた本道の左に
小路あり。川を渡りて下れば岩に觸る、の水鼓怒し、一間餘
の奔湍注ぐ所、藍碧の深潭をなして其底測られず、樹木稀な
るも巨岩之を掩ひ、さすがに物凄し。此處、伊豫松山石手川
の上流に在る涌ヶ淵に髣髴たり。彼は三層の潭をなし直に川
を成せども、此處は溢れて直に岩頭に掛り、十一丈餘の飛泉
となる。落口に至る處、鐵の棒を建て、綿を張る、注意は到
れども防禦は未だし。身を岩頭に致し、右手に樹をつかみ、
踵を岩角に托して覗けば、水は岩面を傳うて下り、宙になり
ては注がず、危は下より仰ぎしに百倍すれば、奇觀と評す
べきは更になり。吾を指さして下より見る人は、さすがに小

時◎序

豫め
前以て前より

半月形
三日月なり。

(秋) ○秋の 旅

八百八十二

さし、瀑の高さを知られぬ。誰が手に落つるかは知らねど、
豫め用意したる、十月三十一日と記せる名刺を落口より流
す。誰が所爲にや、瀑の高さを測る爲め亂れて見苦しかりし
カタン絲をも序に流しやり、元の路へと引返したり。瀑上に
白龍石坐禪石、錫杖石等有る由に聞き居りしも、その何れを
も知るに由なかりき。又、三鈷の松、瀑に臨みて立つと古書
に見わたるも、今は枯れたるにや、それと思ふ松もなかりき
雄瀑は六七町の處にして、之を路の左に得たり。こは如何に
名ばかりの瀧、急流の半月形に奔注するもの、心せずば見落
すべし。二三株の楓あり、此處にも未だ紅葉せず。凡そ瀑に
雌雄の稱ある。雌瀑低く、雄瀑高きが常なるに、此處のは相

一書云々
或る書物には

岐路
わかれみち。
わだみち。

杣親
樵夫の通ふみ
ち。きこりみ
ち。

◎時序

(秋)

○秋の 旅

八百八十三

勝 尾 寺

反す。一書には、奥の院瀑と記されたり。寫真には、高さに
甲乙なきやうに寫されあるも、爾後は其大小高低を比較して
寫して貫ひたく、さもなれば各其高さを記入して貫ひたし

雄瀑より山路深う辿れば、溪流常に吾と逆行し、檜の苗
植ゑし山の下に、政之橋架る。渡りて二町餘の處に岐路
あり、本流は西北より、別に細流ありて東北よりす。
此處小落合とも云ふべく、一間許の土橋架る。橋渡りて
左せば、今まで友たりし本流に添へども杣路ぞや、渡ら
ずして直に進みて茶店を得、古びし掛時計の針は、午後

◎時序

(秋)

○秋の旅

八百八十四

二王門
二王のある山門

一時を指せり。進めば細流聲を絶ちて、路は漸う下りとなる。茶店の附近は、豊能、三島二郡の境界地點なるべし。やがて通り掛る杉の木立、行手に一本松あり。左ちかみちと人に教ふる札立つ。されど、急がば廻れとの戒しめ、山を右にし竹林を左にし、初渡も鳥聲聞きつ、とろ／＼阪を急ぎ足に下れば、樓門見ゆ。問はずと知れし勝尾寺なり。見上ぐるばかりの二王門、朱塗半ば剝けて秋色寂び、左右には厳しく立つ金剛神、左のは密跡金剛、右は那羅延金剛、上には應頂山の額掲げらる。門内より進む處には櫻樹多く、春の花を偲ばしむ。放生池を右にして進めば、やがて左に下

幽磬
かすかに聞ゆる磬

寶龜
聲光仁帝の御宇

兵燹
兵火に同じ戦争によりて起る火

◎時序

(秋)

○秋の旅

八百八十五

馬の標石あり、二時に近き秋の日、斜に左の頬を射る。仰げば山腹に聳ゆる幾多の寺樓堂舎、半紅の楓樹の中に隠見し、白雲縹緲として淨地を護し。幽磬人を導く。石垣の下に坊あり、應頂會の門標掛る。此會よ、諸堂宇大修繕の本部なり、當山は眞言の寺院、昔は彌勒寺と稱し、僧善仲、善算、開成皇子の開基、寶龜八年の建立とぞ。同十一年、沙門妙觀此山に登り、其本尊なきを見て自ら栴檀香木もて、十一面觀世音の像を刻む、則ち今の本尊にして西國三十三所、第二十三番の札所あり。のち元暦元年、平氏追討のとき諸堂宇兵燹に罹り、同四年源頼朝、命を傳へて再建せしめたり。石垣に沿うて石階を攀れば、鐘樓と相對して本堂聳ゆ。堂

◎時序

菴蔚
樹木のしげる
形容。

反映
反射してうつ
ること。

(秋) ○秋 の 旅

八百八十六

後は青山にして老樹菴蔚、處々に紅葉を點綴して秋を描き、堂の古色と配合極めて雅なり。境内の紅楓を賞し、左の石階を上れば徳本寺との標石苔蒸して薬師堂あり。堂の左側に奥院路あり、山中に入れば般若臺を得、これぞ奥院六角堂と稱するにて、開成皇子自ら寫せる大般若經を藏めし古蹟、前に彌勒の大銅像あり。境内の前には、一段低き處に古びたる、旅舎兩三軒あり、さきの近路取らば則ち此に來ると知られぬ再び石階を下りて本堂の前に立つ。山の紅葉は夕陽に反映して美しく、箕面にては失望したれど、此處にては稍満足す。寺の事務所の前より、直に山路に入れば標木あり、開成皇子御墓としるす。上方に展して更に進みて得しは二階堂、此處

◎時序

標木
目じるしの立
札。

妙見路
吉川村の妙見
へ行く路。

修繕
ふしん。つく
るひ。

(秋) ○秋 の 旅

八百八十七

圓光大師の舊蹟にして、左なる坊と廊を架して通じ、廊の中央に鐘吊さる。堂背は青山、堂下は修竹を隔て、二王門を望む。北に進めば妙見路、絲よりも細く山腰に通ず、十歩許の處眺めよく、脚下の山を隔て、遠く平野を望み、天の盡くる處には河内の峰巒半ば雲に入るが見ゆ。再び堂前に引返し、林の中を一直線に下れば、最初上りし寺門の側に出で、左折數歩、真正面に進めば元の二王門に出づ。境内には、以上記せる外、護磨堂、御影堂、開山堂、影向石、西方の松等ありき。本堂と二階堂とを除くの外、今し修繕の眞最中なり。積荒神は、二王門と相對する三間幅許の阪路を攀づべし、距離僅かに二町、地高けれども樹密にして眺望なし。

◎時序

(秋) ○秋の旅

芥川
三島郡の村名

芥川の一夜

芥川は高槻町の北、山崎街道の一驛、寺門より四里と聞きたり。一町目との標石立つ處より、路は峻しき下り阪、左右には幾重にも山聳ね、峰にのみ松樹生じ、その以下には雜木茂る。兩山相合する中央は薬研を立てたるが如き谷合、一道の水注ぎ、上方より臨めば、細徑絲の如く曲折す。吾は恰も薬研の右腹を、疲れし足の石車に乗り易く、轉ばじと身に力を入れ、下へへんと降るなり。やがて十町と十一町との半に達すれば路漸く平かに、大橋の下に地藏堂あり。山上より此處まで、半腹以上は斜陽の影明かに、以下は山影の黒きを右に

斜陽
夕日のこと夕陽。

◎時序

(秋) ○秋の旅

連山紫江
山々が暮色を帯ぶるを云ふ

うた、
轉の字を用ふ
いよ／＼とます

したるが、今し釣瓶落してふ秋の日脚、全く山に落ちて吹く風身にぞしむ。

川に沿ひ下れば家あり、家あらば必ず水車あり、水車あらば必ず家あり。漸う粟生の部落に入れば、山低うして夕日右の頬を射る、三時四十分なりき。粟生は豊川村の大字、勝尾寺も此大字に屬するなり。河内一帯の連山紫に、半輪の月淡き夕暮を、稻負ふ農夫に路問ひ、牛ひきて歸る牧童にも路問ひ遇ふ子守子にも路問ひ、迷はじと田間の路を辿り、石橋を渡りて竹林を穿ち、電信柱立つ道祖本にて本街道に合すれば家々には燈すでに上り、月は清く冴わて吾が影を黒く砂地に寫しぬ。此處より一筋路ながら、知らぬ路のうた、遠く、午

◎時序

強ひて
おしきりて無
理に。

路の難易
道路の險阻を
平夷。

(秋) ○秋 の 旅

八百九十

後八時と云ふに芥川に這ひ着く。勝尾寺より四里と聞けるも四里半乃至五里に近かるべし。

附記す。大阪方面よりして箕面を経、歩を勝尾寺に及したる人士は、再び箕面に引返すが得策。が勞多くして、勝なし。強ひて越さんせば茨木に出づべし。余は山崎街道を北に、櫻井には楠公父子訣別の昔を偲び、天王山には古戦場を弔ひ、京に入りては先づ三尾の秋を訪ふべくと、此處芥川に出でしなり。又、西京方面よりする人は、茨木より勝尾寺を経、箕面に出で大阪に出づるもよけれど、路の難易の點よりすれば、矢張大阪まで汽車にし、箕面に往復するが便なり。

◎時序

狐渡
淀川に設けら
れる渡津。

比較
くらぶること

(秋) ○秋 の 旅

八百九十一

三尾の秋を賞せし夢醒むれば、客舎の殘燈影暗うして秋雨蕭々、身は是れ芥川にありけるなり。土人形にはあらざれど雨は旅の禁物、待ちて十時に至るも霽れず、京都は更に他日を期すべく、狐渡を越えて八幡に詣で、京阪電車沿道の勝を探り見んかとも思ひしかど、是も亦決行しかね、今はど高槻驛より身を汽車にし、心ならずも大阪に引返しぬ。

又、左に録するは拙堂の文、今日と比較して参考となるのみならず、漢文の結構も知るに足るべく、と思ひ和譯して示せる所以。

余攝に在る既に浹辰、遂に將に京に入らんとす。久しく箕面

◎時序

泱辰
十二日間の事
を云ふ。

盤廻
ぐる／＼まは
るこそ。

琅然
水の清き音に
響く形容。

(秋) ○秋の 旅

八百九十二

の勝、幾旬に冠たるを聞く。迂路過り觀るを謀る。二十七日
下午、大阪を發す。東北長柄川を渡る、行くこと五里、山下
に至り、盤廻して上る。則ち淨境別に開け、清溪奔駛、紅欄
焉に架す。此間竹經松緯、一往幽折、心甚だ之を樂しむ。
但日昏黑、寺門閉す。門前の茶店に投宿す。背は即ち溪、終
夜聲有り、琅然枕に到る。明日門開、觀音堂に至る。稍前
めば、左右に磴あり、左を行者堂と、右を辨天宮と爲す。
並に宏壯、合せて之に命じ、瀧安寺と曰ふ。満山皆楓、爛然
霜に飽き、色渥丹の如し。水巖の間に綺錯し、時に墜錦あり
波に點じ、杳然流れ去る。談する者多く、其勝高雄の上にあ
るを言ふ。意ふに然らん。後門を出で溪に沿うて行く。楓盡

後門
うらもん。

鞆鞆
瀑のひゞきの
形容。

布引瀑
神戸の諏訪山
に在るを云ふ

◎時序

(秋) ○秋の 旅

八百九十三

き松來り、水窮り石出づ。巨巖ありて峙立す、大厦屋の如し
唐人戻と曰ふ、戻の言たる反なり。相傳ふ、昔外國人あり來
り遊ぶ、此に至り險を畏れて去る。故に名づく。更に進め
ば、大聲鞆鞆として山谷に震ふを聞く。溪轉ず、瀑布絶壁に
掛るを望見す、長さ二百丈可。珠を噴き空に飛び、跳擲し
て下る。潭底に至り、復逆上す。輒ち轟然雷動す。一佛堂
あり。瀑に面す。登りて焉を觀る。凜然魄悸き、久しく留る
能はずして去る。聞く近畿瀑布、那智を以て第一とし、此瀑
之に亞ぐ。思ふに當に然るべし。且つ此瀑直下、略遅回せ
ず之を布引瀑の曲折して下るものに比すれば、其勝各異な
る。曲者委蛇、態を著す。小品の文なり、直者奔放、勢に駕

委蛇 委曲に同じ文
趣むきを云ふ

◎時序

碧を蓄ふ 青々としたる
水をたむるこ
なり。

(秋) ○秋の 旅 八百九十四
する大篇の文なり。或謂ふ、文は曲を貴び直を賤しむと、通
論に非ざるなり。余二瀑を觀て文に大小の別あるを知れり。
堂の右より磴を躡んで上り、瀑頂に出づ。頂曲碧を蓄ふ、方
三丈、上流灌注し、底の深さ測られず。蓋し瀑の源なり
後門より此に至る。凡そ十八町なり。又一里許、勝尾寺に至
る。中堂に觀音大士を安んず、西國三十三所の一たり。前門
を出で、阪を下る五十町、郡山に至る。遂に北上し京に入る
數日、往いて高雄及び、東北寺に遊ぶ。兩地の楓都下に冠た
り、號して勝區と稱す。然れども。余終に箕面の勝を忘る、
能はず。

險岨云々 けはしき路を
登らせ給ひし
を云ふ。

凡ならざる
世の常でない

◎時序

寒 霞 溪

寒霞溪は舊、神懸、鉤掛、神翔など作らる。その初め神
懸一に鉤掛と云ひけるは、應神天皇此地に遊び給ひし
時、鉤を岩角に掛けて、險阻を攀ち給ひし故の名。後世
に至りて詞人、文字の雅ならざるを厭ひ、終に寒霞溪と
稱するに至れり。又、一に浣花溪と云ふは、杜少陵の古
典によりたるにて、貫名海屋の呼びそめしもの。豊前の
耶馬溪は山陽によりて名を馳せ、大和の月瀬は拙堂によ
りて知られ、詞人墨客相訪ふもの多く。此處は年久しく
南海の小島に埋れしも、漸く其勝の凡ならざる事を知ら

○秋の 旅 (寒霞溪)

知己
おのれを知り
呉る人の義
寒霞溪の景を
取る人の義

◎時序

什多し
詩文等が多し
と云ふ義

(秋)

○秋の 旅 (寒霞溪)

八百九十六

る、に至れり。蓋し、古來知己なきに非ず、天保二年に
は既に海屋翁遊び、其以前には芭蕉翁も句を残り、明治
二年には成島柳北殊更に航して訪ひ、依田學海は小品十
五章あり。其他にも什多く、一々茲に録するに堪へず。
所在地の小豆島は、全島を以て小豆郡を形成し、四國
本土を距る一里十二町餘、東は播磨灘に瀕し、西は鹽飽
群島に望み、少東北には家島群島波間に出没す。島の周
回は三十里二十三町餘、寒霞溪は殆ど島の中央に位し、
探るに東廻と西廻の二道あり。東廻は路頗る險、景
亦多からず。余は西廻の線を取れり。世に傳ふる十二景
は鎌田玄溪の選にして、西廻に屬す。

御代名地
古昔、高貴の
方の御名を後
世に残さんた
め、御名を冠
らせたる部民
を設けたる地

麗かに
天氣のよきを
云ふ。

◎時序

草 加 部 灣

一に、内海灣と云ひ、寒霞溪へ遊ぶもの、上陸地點、沿岸の
地は、天武帝第一皇子草壁王の御名代地と定め給ひしことあ
りて、内海の入江の浪も御名代の昔戀しみ立歸るらし、どの
和歌もあり。

又、明治二十三年四月には 今上帝 吳、佐世保の兩軍港
へ行幸の途次、此に御寄泊あらせられし事さへあり。爾後島
民は、御眞影を灣頭の八幡社に奉掲し、年々四月十八日を以
て其紀念式を擧ぐるとか、洪恩想ふべし。

舟既に灣に入りぬ。此日秋晴殊に麗かに、面に當るの峰巒

(秋)

○秋の 旅 (寒霞溪)

八百九十七

◎時序

山水双美
山水共に景色
のうつくしきを
云ふ。

蟹舎漁莊
滴家のこまな
り。

(秋) ○秋の旅 (寒霞溪) 八百九十八
影を清波に落し、水中の天を行くに異ならず。見渡せば風帆
來往、漁歌遠近、山水双美の景に酔ひつ、汽船陸に近づけ
ば、點々の蟹舎漁莊數ふべく、青松白砂の地、早くも草壁村
に上陸せり。余等は、是より十二景を探らんとするなり。酒
に氣を得、興しきりに動く。

十二景

- 第一 通天窓
- 第二 紅雲亭
- 第三 錦屏風
- 第四 老杉洞
- 第五 蟾蜍巖
- 第六 玉筍峰
- 第七 畫帖石
- 第八 層雲壇
- 第九 荷葉嶽
- 第十 帽子岩
- 第十一 女蘿峰
- 第十二 四望頂

一簇の紅葉
ひこかたまり
のみみぢ。

訝然
穿たれたる形
容。

躑躅
つつじのこゝろ

◎時序

第一 通天窓

(秋) ○秋の旅 (寒霞溪) 八百九十九
草壁村大字上村より、路漸く爪先上りとなり、進むこと約十
二町、溪流清き處、小橋人を迎ふ。一簇の紅葉を見つ、此
橋を渡れば、双眸に入り來るもの即ち通天窓。巍然として一
峰聳ね、其中腹に訝然として、自然に穿たれし圓き窓、遙か
に碧空を見るべし。學海翁の文に曰く、
一峰聳起し、巖洞窅然たり。穿開して窓牆の如く、亮か
に碧空を見る。山は躑躅點綴して、其景致を助く。余嘗
て金洞に遊び、遠く金鷄の山を見しに、巖石穿ちて圓窓
を成せり。殆ど此に類す。

(秋)

○秋

の

旅

(寒霞溪)

◎時序

勝具に乏し
山水を跋渉す
るに足が弱し
さの義

掬飲
両手にてすく
うて飲むこと

(秋)

◎秋の 旅 (寒霞溪)

九百

翁は更に第一に渴飲澗の目を設けたり。其文に曰く、
余勝具に乏し、星岳步履極めて健なり。且つ本州人なる
を以て、常に此險に習ふ。余疲る、こと甚し。攀躋し
て登る、渴忍ぶべからず。導者瓢を携ふ、之を問へば則
ち酒なり。余素より飲まず、渴益急なり。忽ち一澗に
遭ふ。亂石層累し、泉石罅より盆出す。涓然として玉の
如し。掬飲すれば、氣始めて蘇す。余星岳に謂つて曰く
昔佛人阿弗利加に遊び、熱沙千里、殆ど渴死せんとした
りしが、俄かに泉を得、頭を濡して争ひ飲み、曰く、天
下の美饌佳肴も、水の甘きに若かざるなりと。果して然
り。星岳酒を舉げ、一飲して盡し、大笑す。余乃ち此を

名づけて、渴飲澗と爲り。

第二 紅雲亭

幾條もの
いくすぢもの

美観
美しきみもの

三伏の頃
夏のまさかり

◎時序

(秋)

◎秋の 旅 (寒霞溪)

九百一

世に素麵溪と呼ぶるは、數十歩登りて之を得たり。溪廣か
らざるも、一面の平石底をなし、幾條もの泉をが上を走る。
其状白き絹絲を亂すが如く、而も亂れず。兩岸の紅葉相映す
る、殊に美観なり。蓋し、素麵溪の名、此に基づくべしと雖
も、其水清冽、三伏の頃に遊び、素麵を浸して食ふに宜しき
により、此名ありと聞く。學海翁の文にも此事果してあり。
紅雲亭は、麵澗の上に架せられたる亭子、草葺にして竹の欄
干、雅にして潔、以て遊者の憩ふにまかす。附近は紅葉の

◎時序

雅潔 俗ならずして
きれいなるこ

絲麵 そらめんのこ

歎賞 いたく賞する
こと。

(秋) ○秋の 旅 (寒霞溪)

九百二

しき美しく、眞に紅雲の中に坐するに異ならず。翁の文には
溪山佳なりと雖も、動もすれば憩ふ所なきを病ふ。星岳
嘗て同志を課り、一亭を麴湖の上に築きたり。茅屋竹欄
其雅潔を極む。兩石峰其前に聳立し、泉あり。峰脚より
流れ、澗石に漫延し、淨して素練の如く、清して甘し。
嘗て聞く、絲麵を浸して之を食へば美甚しと。故に名づ
けたるなり。

第二 錦屏風

紅雲亭を距る二三十歩、左顧すれば一面の絶壁、屏風を展べ
しもの、如く、青苔紅楓、自然の畫を成し、人をして歎賞去

◎時序

偉觀 すぐれたる眺
め。

石縫 石と石との合
ひ目。

巨杉云々 大木の杉が天
までも高く聳
びゆるを云ふ

る能はざらしむ。其稱、景と相副ふ。蓋し、新霜木葉を染む
る晩秋ならざれば、此偉觀を呈せず。學海翁の文に曰く、
巖壁一面、平なること、削り成したるが如し。矮松短楓
石縫に叢生し、蔦蘿牽纏、畫幅を展ふるかと疑ふ。聞く
新霜始めて降れば、草樹皆赤く、錦屏の實始めて著ると
余晩春を以て此を過ぐ。綠樹叢中、一二の殘櫻を見る。
亦愛すべきを覺わき。

第四 老杉洞

錦屏風よりすれば、少しく北なり。巨杉蔚々として天に參る
の處、削り成されし峭壁あり。其腹に一洞門をなす。境や幽

(秋) ○秋の 旅 (寒霞溪)

九百三

幽寂 時◎序
しつかなるこ
ご。

呀然 洞門の開きし
形容。

概 おもむき。あ
りさま。

(秋) ○秋 の 旅 (寒霞溪) 九百四
寂 神仙其内に栖むかを疑はしむ。學海翁は、杉洞谷として
文あり、曰く、

路益險に、境益奇なり。左顧すれば一巨岩を見る。呀
然として開いて洞門を成す。老杉矗立、鬱として翠雲の
擁護せるもの、如し。豈に神仙ありて、其中に栖息する
ある歟。

第五 蟾 蜍 巖

路の左右にある巨石、其形の蟾蜍に似るよりの稱、兩眼突起
のさま、愈真に迫り、坐して天を睨む。若し俯さば、將に
余等を吞まんとするの概あらん。學海翁、之を記して曰く、

蟾蜍巖は、路を挟みて竝踞す。其石巨大にして八九尺
可、双眼突起し、背に斑點あり。左のは脚を張りて天を
仰ぐが如く、右に比すれば差小なり。

第六 玉 筍 峰

石峰多きが中に、其拔群のものは是。山徑をたどりて右を眺
むれば、巍然として天を刺す。其筍と謂はんよりは、寧ろ劍
の字こそ適ふべけれ。勢殊に鋭く、快哉と呼ぶに足る。翁
の記に曰く。

山中石筍極めて多し。其最も筍に似て且つ大なるものを
玉筍峰とす。峰尖峻鋭、萬仞空を凌ぐの勢あり。金

斑點 まだらのぼち
り。

差 比べて少しく
違ふ意を表は
すに用ゐる語

酷肖 大に似てある
こと。

◎時序

(秋) ○秋 の 旅 (寒霞溪)

◎時序

目
名即ち名稱の
義。

絶谷
ふかき谷のこ
そ。

掩映
おほひかくす
こと。

(秋)

○秋の 旅 (寒霞溪)

九百六

洞の天燭峰、此に似て大なり。竝に酷肖す。
翁は更に、蟾蜍巖の次に錦繡谷の目を擇べり。其記に、
双巖最も巨に、屹然として天に聳ね、下絶谷に臨み、杉
風叢雜して其脚に掩映す。また殘櫻あり、葉赤し。及び
紅躑躅、上下を妝點す。星岳言ふ、諸勝みな名あり、此
れ獨なしと。余乃ち名づくるに、錦繡谷を以てす。且つ
言ふ、請ふ晩秋を待ちて、吾が言の誤らざるを證せんと
此附近、最も紅葉に富み居れり。

第七 畫帖石

是も亦形狀によりての名、之を登る途中の左に見る。其岩の
さま、疊んで帖を成す、人若し之を繰ることを得ば、如何な

師云々
書畫の形狀に
似たりと云ふ
意。

壘壁
さりで。

三株
三本。三基と
云ふに同じ。

◎時序

(秋)

○秋の 旅 (寒霞溪)

九百七

第八 層雲壇

る景か眼前に現れん。其名と實に相副はざるに非ざれども、
好みて命じたるもの、如し。學海翁の小品には、
大石あり、形疊んで帖を爲すが如し。斜に路傍に寄る、
其陰數人を坐せしむべし。傾けども危からず。

畫帖石を距る僅かに一町許、東のかたに大岩、層々として偉
觀を成す、其形狀宛ら壘壁の如し。學海翁叙して曰く、
大石屏を左右に植て、其中を空うするものを、空層洞と
名づく。右屏に横斷の紋五つあり、刻畫の如し。左屏は
疊折して立ち、空所に當りて石筍三株を見る。形容各

題目
題に同じへ

荷葉
はその葉。

宛然
さながら。ちやうど。

◎時序

(秋) ○秋の旅 (寒霞溪)

と。其題目同じからずと雖も、境は一なり。讀む人心せよ。

第九 荷葉嶽

一大巨岩の面、縦横に龜裂し、恰も荷葉の皴に成す。是れ名を得る所以。葛蘿まどひ、秋色殊に美なり。之を登山路の北に訪ひぬ。學海翁の記に曰く。

一巨壁、横幅畫の如し。荷葉皴に成し、斷紋分明なり。凡そ畫法に皴を云ふは、峯巒層壘の處を擬したるなり。乃ち披麻荷葉皴體の名あり。此壁、獨り皴法を示す、宛然たる畫本なり。亦一奇なり。

碧空
碧天に同じおほそら。

矮樹點綴
たけ低き木が處々に生ずること。

傳會
附會に同じ、ごつけ。

◎時序

(秋) ○秋の旅 (寒霞溪)

第十 帽子岩

荷葉岳より、少しく東北に進みて得たり。幽谷より碧空に向ふ二石筍、高さ各十數丈、其尖頭には更に岩を戴き、恰も冠して立つもの、如し。而して矮樹點綴これが髪となり、更に一奇觀を成す。翁の記には、

二石筍、谷底より突出す。右は高く、左は低く、竝に人の帽を戴くが如し。右は是れ堅帽、左は是れ折帽なり。皴文漆色、形容宛然たり。矮樹巖を穿ちて生じ、以て領巾に擬す。亦傳會にあらず。

◎時序

(秋)

○秋

の 旅

(寒霞溪)

九百十

貞女
みさを正しき
女。節婦。

第十一 女 蘿 石

帽子岩の觀を終へ、少しく登れば路岐る、左して女蘿石を得たり、時正に晩秋、滿目紅葉ならざるはなきに、この女蘿石のみ蒼翠滴るが如く、恰も貞女の操を守れるに似たり。再び歩を返し、右の道を攀づ。此處を所謂鉤懸、鐵鎖に身を托して登る處、應神帝の御遺跡なり。翁の記に曰く、

星岳言ふ、晩秋滿山樹皆赤し。獨り此壁の蘿蔓のみ翠色を變せずと。又言ふ、壁を繞りて左右に兩徑あり。右は險甚し。相傳ふ、應神帝鉤を懸けて登りたまひしは即ち此處なりと。左徑は較易しと。余乃ち其難に就き、

兩徑
二つの小みち

攀披云云
岩にすがりか
づらによりて
登ること。

第十二 四 望 頂

手を以て足に代へ、攀援して疲ること甚し。山巔に抵る。俯して來路を窺へば、目ために眩す。自ら知らず、何に緣りて此に至りしを得たるかを。

千里一目
遠方まで眺め
らるゝを云ふ

◎時序

(秋)

○秋

の 旅

(寒霞溪)

九百十一

山上に立ちて四顧すれば、山岳海灣千里一目、西は屏風が嶽北は流れの山、東には近く星城山を望み、南は阪手其他の諸山遠近に聳ね、碁布の群島亦歴々指點すべし。此日や、心ゆく程に晴れし秋日和、汽船ゆき交ひ、白帆走する瀬戸内海を隔て、は、山陽一帶の雲山縹緲たり。古來、讚の高松、丸龜備の岡山、播の赤穂、姫路等の城堡、十五箇を一眸に收むと

◎時序

嚮導云々
案内者に言ひ
ひらかす。

荆婦
吾が妻の謙稱
山妻と云ふに
同じ。

(秋) ○秋の旅 (寒霞溪)
て名高し。彼の芭焦翁が、

九百十二

初時雨猿も小篋をほしげなり

この句碑建つ。あはれ、時雨れざる今日、此句の妙を味ひ得ざりき。學海翁の記に曰く、

登りて絶巔に至る、地極めて平坦にして、青草茵の如し星岳嚮導に命じて行厨を開かしむ。余荆婦と相謝して食に就く。首を回して四望すれば、南に阿讚を覽、北に播備を眺め、海水一碧、島嶼其間に點綴す。尤も壯觀なり。歸路は所謂東廻の路を取りぬ。

歸路

諸勝
すぐれたるけ
しき。

徑路云々
山の小路が大
に安らかなり
その義。

其衝
その通り路。

◎時序

歸路は險にして勝少なく、龜岩、燈籠岩、石門、恩山寺、二見岩島あれど、之を既に探り、諸勝に比すべくもあらず。只奇とすべきは石門のみ。學海翁は、更に石門の目に舉げて記すらく。

山巔よりして下れば、徑路頗る夷かなり。往くこと數十歩ならずして、忽ち一大石門の、崖下に拔記するを見る。高さ十餘丈、幅三丈餘。其衝の左右に、隆起して肉角の如く然り。金洞の第一門と相似て、大に之に過ぐ。門内の絶壁下ること能はざるを憾とす。俯して澗底を瞰れば清泉石に激し、其聲勸然たり。實境なりと雖も、金洞の第一石門は尙大なり。其下る能

(秋)

○秋

の 旅

(寒霞溪)

九百十三

◎時序

一步一景
景色の變化の
多きを賞して
云ふ語。

長閑
空晴れて日よ
りの穏かなる
こと。

(秋)

◎秋の旅 (寒霞溪)

九百十四

はざるの點、先生と感と同じうせり。凡そ、五歩に觀を改め
十歩に趣を異にする、既に賞すべきの勝なるに、此處は歩
々に溪迎へ峰送り、曾て聞けるが如く一步一景、變化自在に
して眼倦まず。足疲れず。只筆のこれに相副はざるを悔ゆる
のみまた他日再遊せば、その遺を補ふべし。附記するは、成
島柳北翁の『航薇日記』にして、寒霞溪に關したるもの。其
小豆島を記するものに曰く、

第十時比に兒島をうしろに見なし、小豆島を前に見る。

讃州の手島をば右に見て、小豆島に隣み近づく。この日
長閑にて、舟中戯れ遊びつ、行くに、貫好が日比養ひし
巨鷄ありしことに就き、奇談ありければ『唐丸を夜中に

陽侯
海の神の名。

波不驚
波がたゞぬい
さなり。

戸の
今の土庄を云
ふ。

◎時序

(秋)

◎秋の旅 (寒霞溪)

九百十五

しめて毛をひくといふは、不埒な東京子なり』人々皆ご
よみ笑ひぬ。小豆島の最も高き山を、星ヶ城といふ。其
傍に見ゆるは、有名の神駈なり。

陽侯爲我放新晴。風意如春波不驚。島嶼百千
當面立。一堆疑是星城。

この島の琴塚といふ所を右に望む。こ、は往古は琴を埋
めし地なりと。其の左に見ゆるは流の山といふ、此地に
淨光寺とて一向宗の寺あり。土人いふ、此山に天狗笛を
吹くことありと。琴塚より右には屋形崎あり。其右は淵
崎の港とて、人家三百計りある由、それより戸の障とい
ふ港あり。こ、には狭き海峡に橋を架したり。左は黒崎

◎時序

忌む
きらふ。いや
に思ふ。

白堊
しろ色の土。

香渺
はるかにかす
かなるさま。

(秋)

◎秋の旅 (寒霞溪)

九百十六

の鼻なり、此處より下の女郎といふ島を見る。これは上の女郎と同じことにて、男子も一人の上陸を忌むとぞ。黒崎の鼻を廻るに、巨石斷巖奇怪の形状を見る。其巖の上に石を建て、これに白堊をぬりて標記とせしは、洋客こゝに來りし時かくなせしならん。この邊より右に遠く高松城を望む。その左に八島と五劍山とを近く見る。東南に高く香渺として海上に聳ゆるは、土佐の山々なり。舟進むに隨ひ、正面に阪手の觀音の山を望むに、突兀たる奇峰、本邦には珍らしき山容なり。この讃岐の諸山は五劍山を始め、他國の山よりは奇怪の形状多し。この海峡は八島の汐先にして、鳴門の下流なる故、風潮危険の

蓬窓
こまぶきのま
ご。船のまご

巨松一樹
大きやかなる
松一本。

◎時序

(秋)

◎秋の旅 (寒霞溪)

九百十七

地たり。蓬窓より四方を望むに、連山雲煙を吐吞し、數十の島嶼畫圖の如く、風景絶奇といふべし。舟直に内の海に入らんとするに、風少し悪し、とて池田の湊に停泊せり。この湊は、白濱(一名地藏が鼻)を右に望み、海灣深くして風景また佳なり。第四時碇をたろす。此夜月色明らかにして、清光波上にみちぬ。又、神馳の勝を記したるものには、即ち曰く、行く里餘、多湖といふ地に出づ。巨松一樹あり。數百年の物なり。其下に一祠あり、一本松明神と稱す。この地より數百歩にして、内海の海岸に出づ。海灣明媚、右に白濱の山を顧みる、これ前宵停泊せし池田の背にあたれ

◎時序

(秋)

○秋の旅 (寒霞溪)

九百十八

突兀
ぬつくさ立て
るさま。

甘蔗
砂糖きびを云
ふ。

洋客
外国人のこゝ
洋人。

り。其山に面する一堆の山は、内海の辨天山なり。其左に突兀として、奇絶怪絶なる連峰を阪手の観音山とす。その山に對峙して、一峰分折して、猪牙の直立したる如きものを、清瀧観音の山とす。神馳、星ヶ城はその左に蒼茫たり。海濱を歩いて水木村にいたる、始めて煙草の花圃を見る。其色淡紅色なり。此村落、甘蔗を植ゑ砂糖を畝る家多し。平砂淺潮を歩す、半里ばかり鬼崎にいたる。洋客の白聖を塗りて、記標とせし小碣あり。阪手の観音山下に、人家臥蠶の如く見ゆるは、野間、植松の二村なり。此水涯巨石多く、波瀾の激撞するさま奇絶といふべし。清水村を経て、山路を行く數百歩にして、内の

◎時序

(秋)

○秋の旅 (寒霞溪)

九百十九

故山を距る
故郷を遠ざか
る。東京に柳
橋あるより云
ふ。

相識
なじみ。しり
あひ。

磊砢
石のかさなり
合ふ形容。

海の下村にいたる、繁華なる小港なり。石橋あり、刻して柳橋といふ。故山を距る數百里、この地に於て柳橋を渡る、また思郷の情を動かすどやいはん。

綺樓情夢斷。千里故山遙。孤島無相識。

追雲渡柳橋。

この地の升屋に憩ひて一酌す、饅頭を喫す。酒香殺味、孤島の物に似ず、清潔喜ぶべし。この家を立ち出るころ雨降り出ぬ。人々勇を鼓して上村にいたる、これより神馳の山麓なり。このほとりにある石磴、みな自然石を以て造る。古色愛すべし。山路に登るに隨ひ、溪水潺湲として苔石磊砢たり。村落の童女、松葉を竹籃に盛りて、

◎時序

風致を添ふ
おもむきをま
す。

聯句

二人以上にて
一首の詩を作
ることを云ふ

(秋)

◎秋の 旅 (寒霞溪)

九百二十

山より歸り來るさま、大に風致を添ふ。石徑を攀ちて登るに、雨濺ぎ雲沸く。輿丁も足を進むるに困すれども、余と冠童と先登して人々を勵まして行く、冠童余と聯句をなす。

鬢鬚碧雲仙徑開。一簑衝雨上崔嵬。

柳 北

山靈莫笑無桃樹。前度劉郎今復來。

桐 蔭

冠童は、此山に登る三回なりといふ。登ること半里許、素麵瀑にいたる。この瀑は、三丈餘の巨巖の面に流れ、水條線の如く下る。その兩岸峰巒突起して、其狀劍の如く屋の如し。益々進んで望むに、四面皆石山なり。澗水琤々として青松巖頭に生じ、其際にあるは盡く楓樹なり。

温厚の氣
おとなしき風
その義。

筆墨云々
筆にてあらは
し難じその義

丹青
畫のこと。

◎時序

(秋)

◎秋の 旅 (寒霞溪)

九百二十一

り。薜蘿纏綿し、岩松斑爛として石質を埋む。本邦の山岳は異邦と異にして、温厚の氣あるを常とするに、獨りこの山は、奇と怪との兩字を下すべき一勝地なり。山形を四顧するに、尖銳刀刃の如き者あり。夾立屏風の如き者あり。老獅の咆哮する形なる者、巨人の坐嘯する姿のもの、其他千狀萬態、洞門を開く者、溪水を遮る者、變化奇幻筆墨の寫しがたき所あり。支那人の畫く、奇峰怪巖を始めて目睫に見る、實に一大絶勝といふべし。

絶勝始疑天有私。丹青難寫况文詞。半生憐

我煙霞痼。未識溪山蔭個奇。

益々登れば益々奇、愈々進めば愈々怪、一峰一溪といへ

他に絶云々
外の地にすぐ
れたるはさ云
ふ義。

岫雲云々
山上に雲のゆ
きかひしげく
爲に山の形が
色々にかはる
な云ふ。

◎時序

(秋)

○秋の 旅 (寒霞溪)

九百二十二

ごも歩々に其觀を變ず。冠童曾て余に語るに、神馳の勝
他に絶したるは、一步一景なりと。余その過譽なるかと
疑へり。今日其眞を見るに及んで、其奇幻實に一步一景
のみならずざるを知れり。山巔に近づくころ、岫雲住來し
山容出沒して詩歌も形容すべき様なし。且その幽深なる
猿鹿の外一物を 見ず、眞の神仙境なり。冠童いふ、此
山に猿數千あり、一月内十五日はこの谷に栖み、十五日
は阪手の觀音山に移る、其往來の時、索々聲をなし草木
震動す。是れ亦一奇事なりと。峰巒の少し缺けたる所よ
り、讚州の諸山海を隔て、現す。海色蒼茫として間に
洲嶼あり、其内に見ゆるは内の海なり。下村港の人家

悦を云々
手拭にて鉢巻
するこき。

東道をなす
案内をなす。

狂癖云々
物すきなるに
びツくりせり
さなり。

◎時序

(秋)

○秋の 旅 (寒霞溪)

九百二十三

雲烟の間に明滅たり、其風光亦奇絶とす。此時風雨益々
烈しく、山氣冥濛として溪路歩を進むるに難けれども、
余はその奇に耽いて、笠を捨て悦を頭に纏ひ、衆を扶け
て山頂に至る。興丁東道をなす者いふ、遊人神馳に登る
者、みな晴和の日を下す。未だ君等の如く、風雨を冒し
て、この險山に登る者を見ずと。痛く吾輩の狂癖に喫驚
せり。山頂より四顧すれば、山岳海灣千里一目、西は屏
風ヶ嶽を望み、北は流れの山、東は近く星ヶ城を見る。
この山は往古佐々木の城廓のありしところなりとぞ。南
は阪手、其他の諸山遠近に聳ゆ。蒼海香渺島嶼幾千ある
を知らず。讚の高松、備の岡山、播の赤穂、姫路其他の

◎時序

天下の壯觀
此世の美事な
る見もの。

蓬瀛
蓮菜と瀛洲と
の稱に共に神
佛の栖むと云
ふ處。

(秋)

◎秋

の 旅

(寒霞溪)

九百二十四

城壘數十を一望に見る。まことに天下の壯觀なり。

雲岫千重萬重。紅楓如錦映青松。他年洒隱斯
郷好。笑指星城第一峰。

萬仞峰巒滄海間。雲籠老洞路縈環。村泉不似人

寰物。始悟蓬瀛是此山。

山頂に坐し、風雨の中に人々皆瓢酒を酌み、醉興爽快な

り。忽ち連峰雲を起し來り、須臾に滿山冥濛として咫尺

も見わかぬかと思へば、一陣の風來り、雲片散飛して山

容明らか、千里入眼の景、誠に驚くに堪へたり。

山出沒今雲往來。瞬間變幻亦奇哉。我登仙嶺最

高處。長嘯一聲飛酒杯。

俳歌者芭蕉の、

初時雨猿も小篋をほしげなり

といふ句は、此山にて吟せすとぞ。しばし山巔に閑酌せ

しかども天風雲を吹て面を撲ち堪へがたかりしかば、東

道を促して山を下らんとす。今朝、成齋に約し、池田港

より舟を淵崎の港に移したきしなれば、舊路によりて歸

りたらんは、迂路なりとて、西南の芝山に分け登りぬ。

この山は枯草生じ、奇石處々に轉びゐて、松楓の類は皆

小樹にて、清らかなるどころなり。この處を五兒ケ丸と

稱す。それより尾篋上といふ山を過ぐ、景色亦佳なり。

海上より吹き來る風は力よりも鋭く、人々困じはてぬ。

◎秋 の 旅 (寒霞溪)

九百二十五

閑酌

心しづかに酒
のむこと。

迂路云々

まはり路なり
と云ひ。

刀よりも

切るよりも
の意。

◎時序

(秋)

小男鹿
小は添字。を
じか。しか。を

山海の美
山や海のけし
きよきこと。

◎時序

(秋)

◎秋の旅 (嚴島)

九百二十六

ゆくさきの叢より鹿の躍り出で、谷に入るさま珍らしく覺ゆ。

遠近の紅葉白雲ふみわけて

綿のなかに小男鹿のなく

嚴島

此處、一に宮島と呼ばれ、三景の一に班す。松島、天橋立、山海の美を巖にするに過ぎざれども、此處は古戰場としても有名なり。島は安藝國佐伯郡大野村の東海面七町に位し、周回七里三十一町餘、西に大野海峡、東北には宮島瀬戸あり、島の周圍には七浦ありて、一浦毎に

美術工藝
美を表現する
を目的とする
技術、土木わ
ざ。

修廊飛塔
長き廊下や高
き塔。

流連
幾日も居るこ
と。あついで。

◎時序

(秋)

◎秋の旅 (嚴島)

九百二十七

神祠を安置し、之を巡拜するをば鳥廻と云ふ。北端には名高き嚴島神社あり、海中の大鳥居殊に目を引く。美術工藝は、之を神祠の結構、壁間の繪畫等に問ふべく、山海の馳眺は、之を彌山の絶頂に於てすべく、幽邃閑雅の趣は、之を紅葉湖に領すべし。學海翁泛遊小品に、嚴島を記して曰く、
修廊飛塔、大殿巨閣、古ならざるにあらざるなり。壯ならざるに非るなり。寶器珍玩、書畫題詠、工ならざるに非ざるなり、奇ならざるに非ざるなり。吾れ嚴島に流連し、去る能はざる所以のもの、其山海優美の觀と、土木布置の妙とに取るのみ。余、四月二十七日を以て廣島に

◎時序

延きて
案内してその
義

意料云々
意外なりし
の義おもひ
のほか

平相國
清盛を云ふ

(秋)

○秋の旅 (嚴島)

九百二十八

航し、車を馳すること五里、網奈に至り、渡を嚴島に呼
び、社殿周廊を歴觀し、導者詳かに其來歴を説き、延
きて大經堂の西の小岡に至る。龜居山と名づく。登覽す
れば沙灣曲折し、巖岩秀峻、一望百里、心曠く體胖か
に、實に意料の外に出づ。殿閣山に背き風雨を畏れず、
樓脚甚だ牢に、潮汐を吐吞す。亦細心の極なり。世に
平相國の兇暴麗閣を稱す、其此山水を愛し、景に依つて
布設するは、決して暴漢の能く爲すことを、得るにあら
ざるを知らざるなりと。
。又、紅葉湖を記したるものに曰く、
楓溪は、嚴島神社の東に在り。清泉淙々東より來り、石

◎時序

參差云々
たかひに一な
らすして掩ひ
かくすこと

石澗曲折
石多き谷がな
れ曲りてある
こと

市街

澗曲折し、觸れて聲を成す。客舍賞流亭臺榭を其上に築
くこと、凡そ十有三處、地の高低に隨ひ、大小疎密、各
各其宜しきに就き、或は水に臨み巖に倚り、或は崖に架
し澗を帶び、楓樹數百株、上下左右、參差として掩映し
涼蔭地に布き、清氣掬すべく、一片の塵芥、水石の間に
浮遊するものなし。主人の能く意を用ゐること知るべき
なり。主人匾額を請ふ、乃ち水石娟美楓紅澗碧の數字を
書して之を付す。

戸數七百五六十、彌山の北麓に市街を成し、市坊の數十七、

(秋) ○秋の旅 (嚴島)

九百二十九

◎時序

賽者に云々
参詣人のため
に生計を立て
居るさの義

帆橋林立
船の多く泊す
るを云ふ。

(秋) ○

秋 旅 (嚴島)

九百三十

嚴島町として町制を布く。住民は漁業者もあれど、其七八分までは嚴島神社賽者に衣食を仰ぐ。殊に近年は、避暑又は養生として来るもの多く、昔日と全く其趣を異にするものあり。港は東西五町、南北四町、深さ二仞乃至三仞、往昔は、廣島へ輸送すべき百貨、先づ此處に揚げ、更に小舟によりて運ばる、が例なりしにより、街頭の繁華甚しかりしと云ふも、今は直に宇品に寄航するを以て、帆橋林立を成さず。

神社

嚴島神社は、波上に鎮座の官幣大社、安藝の一宮にして、世に宮島と呼ぶる、實に此社あるが爲なり。祭神は市杵島姫

◎時序

莊嚴を極め
立派な限りを
盡すこと。

満潮
みちしほ。

大華表
大鳥居のこま

(秋)

○秋 の 旅 (嚴島)

九百三十一

命、田心姫命、湍津姫命にして、推古天皇の二十二年十二月の創建、本殿、幣殿、拜殿共に莊嚴を極め、祓殿の前には高舞臺あり、其左右には青銅の獅子、石燈籠あり。高舞臺の左右には、平舞臺あり。廣さ百八十六坪、淺洲の上に出出し、月と共に湧く満潮には、海水盈々として來り其床下を蘸し、恰も泛べるが如し。又、樂房あり、平舞臺の尖端の二ヶ所に置かれ、其盡頭には更に火焼前あり、海に出づること七間餘、遙かに海中の大華表と相對し、大燈籠は其一端に置かれ、一しほの壯觀。拜殿の左右には廻廊あり、屈折百四十八間、一間毎に鐵燈籠を釣る。社頭の燈籠とて、宮島八景の一にして、古歌も多

◎時序

楣間
廻廊ののきし

退潮
ひきしほ。

燈痕
こもしびのか

宛として
恰も。ちやう

(秋) ○秋の 旅 (嚴島)

九百三十二

し。廻廊の楣間を仰げば、古今名家の奉納に係る書畫、數限りもなく掲げられ、見る目もいそがはし。鏡ヶ池は、其實池にあらず、半月形を成せる入江の稱にして、退潮のとき其凹處に水を殘し、池のさまをなすを云ふ。美觀は明月影を沈むるの時に在り、是も亦八景の一。若し夫れ潮盈たんか、廻廊すべて波に浸され、夕にしもあれば月は金粉を碎き、百八の燈痕は水中に閃き、筆舌にすべからざるの景、夜月の明かなる頃、大鳥居の下をば、帆かけながらに通る小舟、宛として畫に見るやうなり。

紅 葉 澗

掌大云々
手の平のおほ
きさ程なりし
もその義。

趣を成す
ありさまなす

砥
さび石のこころ

◎時序

(秋) ○秋の 旅 (嚴島)

九百三十三

神社は別として、景勝に富みたるは此處、地域たる、眞に掌大に過ぎざれども、林泉の妙を盡さざるはなく、亭あり、溪に臨んであり。榭あり、崖に架してあり。閣あり、天を磨して聳ゆ。誰が見ても宛然たる一仙境、嚴島神社の御手洗川は實に此に發するなり。衡門を入りて進めば、淙々たる澗水は琴筑の韻をなし、迫りては湍となり、懸りては小瀑布をなし、淀みては淵をなし。殆ど深山幽谷の趣を成す。其水の稍廣くして深き處には、鯉と鱸とを養ふ、殊にをかし。而も其水の淺き處には、砥石とさび石のこころあり。固より人工七分の地なるも、自然の足らざるは奇石を配し、嘉木を栽て景を補ひ、紅葉最も多

◎時序

小杜 杜甫を老杜と云ひ、杜牧を小杜と云ふ。紅葉は二月の花より紅なり。人。吟ぜし詩。

(秋) ○秋の旅 (嚴島)

九百三十四

し。是れその名を得る所以にして、石徑に小杜を氣取るの客少なからず。而して興を買ふには何不足なき此處、掌を拍てば忽ち美酒佳肴時を移さずして至る。

諸勝一括

大宮岡に至れば千疊敷、四方の壁に掲げられし杓子は、何れも祈願の旨と奉納者の姓名を記す。是も漏すべからざる勝の一か。五重塔、小なれども觀るに足る。

瀧の尾には小飛泉あり。此ほとり櫻樹多くして望み打ち開け、梅林も亦あり。二月より四月にかけての眺め宜し。秋の此頃は、西行返阪の故事位にとゞめを刺すより外なし。

一層の眺め 一しほのけしき。

夕日を云々 夕暮に急ぎて歸りしを云ふ

◎時序

(秋) ○秋の旅 (嚴島)

九百三十五

尙、櫻樹の多きを問は、大元浦、花時は枝頭雪堆く、碧波に映じては一層の眺めぞ、本社ほんしやの廻廊くわいらうを西に渡り盡し、松原より西して海に沿ひ訪ふべし。又、此處こゝに大元神社あり、後丘を多寶岡と云ひ、多寶塔あり。往昔わうせき、陶晴賢すねはるかたの毛利氏もうりしと戦ふや、其陣營そのちんゑいを構へたる處ところ。花の洞ほらとは、網の浦あみのうらに越ゆる所の道の稱、花多き故なり。彌山みせんは島中の高山、絶頂は眺望てふぼうひろく、遠近山海の勝一々指すべく、中途ちゆうとに探るべきの舊蹟きうせき、少なからずと聞きしかど秋の日あしのいと短く、寶物の主なる物さへ見漏したる身、何とて之を悉くし得べき。一夜の夢さへ結ばず、夕日を載せての舟、吾を送りて又岸に着きぬ。

時◎序

(秋) ○秋 の 旅 (三尾の秋)

九百三十六

實に
實行するを云

三尾の秋

依稀として
ぼんやりさし
て。うつすり

曾て雨に流れし高尾、楨尾、梅尾の紅葉狩、今日こそ實にせんとて、五時十二分といふに梅田を出づ。早晨の秋氣冷けく平野の霧を縫ひ行くものは汽車のみ、處々の村落尙夢に在りて折々鶏の鳴くを聞く。今遊も亦友なし、世を捨てず、世にすねず、時代後れの詩筆にしたしめばか、例によりての一人旅、さればとて、腰より放さぬは瓢なるよ。
高槻を過ぐる頃、河内の連峰依稀として夢の如く、初めて東に現れ、千頃の耕地には稻を刈る農夫、既に鎌の手忙しく處々には勇ましく百舌鳴く。前日、箕面より勝尾寺に詣で、

訣別
わかるゝこと

瓢の尻云々
汽車中にて瓢
の酒の大半を
飲みしを云ふ

◎時序

(秋) ○秋 の 旅 (三尾の秋)

九百三十七

芥川に一夜を明せし旅なりせば、楠公父子訣別の櫻井の舊蹟を訪ひ、天王山にも上りて合戦の昔を偲び、ゆる／＼京の秋探る客ならましを、今日は日歸を期しての曉發、東寺の塔は早くも天際に我を迎へ、やがて其影は右に低う、七條停車場の人となりぬ。

花園行の汽車は、時間早くして聯絡するもの無く、紅葉に憧れては待つに懶く、いざとばかりに憊ひしは、當時流行のゴム輪の軽車、瓢の尻を軽うせし事とて、朝寒の身にしむを感せず、元氣よくも烏丸通を北へ、本願寺のいかめしき結構を左にし、西より北、北へ行きては西へと、二條通を宮離へつき當りしは西、堀に沿うて少しく北し、更に西すれば二

◎時序

御溝
二條の離宮の
おほし

主唱
人に先んじて
言ひ出すこと

(秋) ○秋の 旅 (三尾の秋)

九百三十八

條離宮の北畔、朝日はきらりと千古のみどり滴る城牆の
松を漏れ、御溝には秋水すみて清く、處々に枯れて立つ柳、
春の姿しのばれて優しきも、相隣れる監獄署は嬉しからず。
離宮の莊嚴をけがす、撤去して可なり。吾れ若し、京都に住
むの人ならば、敢て主唱するをば辭せず、と呟きたり。
朝日に背を射らせ、進めばやがて妙心寺、仰ぐ山門恐れげ
もなく、車のま、に潜りつ、敷石にたく霜に轍の跡を二す
ち留め、鐘樓や堂塔、參差として松間に聳ゆるを見やり、左
に折れて又北に、曰く何寺、曰く何院、左右に構へしいかめ
しさ、右に一枝の紅葉ゆかしく、山茶花なかば散りしを見、
裏門に出づれば、坦途砥の如く西に通ず。

◎時序

星霜云々
年つきの數多
たつを云ふ

勤行の誦經
おつさめの讀
經

漸く
次第に。だん

(秋) ○秋の 旅 (三尾の秋)

九百三十九

酒氣醒めて秋氣や、寒く、徒歩して殊更に暖を取り、少し
く進めば古松修竹、半ば紅くなりし楓を交へ、京の西には珍
しくあらぬ山門聳ゆ。されど、朱の色はげて半しろく、星霜
の久しきを思へば流石にゆかし、是れなん仁和寺。門内を窺
へば、亂松满地、堂塔處々に隱見し、朝の勤行の誦經ほがら
かに聞ゆ。曾て見し、花の夢しのびつ、又車に乗る。此門
よりは、京都市内にまして砂地の幅廣き路、輕車音せずる
が如くに馳せ、嵐光樹色、漸く詩趣を深うせり。
車挽きつ、案内する車夫、車上にありて聞く吾れ、いつと
なく進みし小一里、松まばらに賽路の左右に立ち、秋を彩る
紅葉の一二株、鳥居を得しは八幡宮、地は早くも梅ヶ畑村、

◎時序

酒旗云々
酒賣るしるしの旗ひらくを云ふ。

標識
識は音シなりシキにあらず

(秋) ○秋 の 旅 (三尾の秋)

九百四十一

三尾漸く近うして茶店には酒旗颯り、行くさの客は兎も角、歸るさの客を引かんとす。左に勾配急なるもの幅は四間に餘れる道あり。立てる札、言はずして嵐山へ行く路ぞと教ふ。車夫も亦、歸るさには、此處よりして嵐山の秋、必ず訪ふべきよし教ふ。
少しく進めば路は自然に高く、車行は却つて徒行する者よりも遅く、幾人かに先越さるゝに氣いらち、車をすて、行くやがて里程標建つ。三條大橋より、二里幾町かと記されたるも、端数は讀み難ければ、十幾町か二十幾町か、但しは單に幾町かを知るに由なし。路幾曲して、新舊の二道岐る。高尾まで二十一町二十三間との注意標識あり。右は舊道、左は新

◎時序

旗亭
料理屋又は旅舎などの稱。

推すが如く
小阪の路を少しづつ進むこと

(秋) ○秋 の 旅 (三尾の秋)

九百四十一

道にして一小橋架る。若し舊道を取らば、幾町かは近かるべし、又しても車に乗り、左に馳せしむ。
小學校と役場との前を過ぎ、推すが如くに車を行らせ、ひだり右へ上りつめて前山を迎ふれば、梶さへ執らば獨にても走すべき阪路、愉快に降れば一たび岐れし舊道相合し、右には維新の歴史を有すべき古き茶店、左には新しからねど當世風の旗亭あり、酌むは言ふまでもなく、宿するにも不足あるまじき結構を床し。亭の下は溪をなし、紅葉少なからず。地の益、三尾に近づきしを知られぬ。
亭を右にして進み、遠く後にして更に山裾を北すれば、亭は溪を隔て、相對し、下方には古寺あり、紅葉のにしき美し

◎時序

周山
丹波國の地名

茶棚
茶店のこま。

數太白云々
大杯二三杯で
酒をぐつと飲
む。

(秋) ○秋の旅 (三尾の秋)

九百四十二

きが中に、石塔亂れ立つ、必ずしも趣なしとせず。やがて小阪路降り、又しても舊道に合す。右すれば直に梅尾に達すべく、而して周山街道なり。左する一町許、高尾の紅葉茶屋に達す。行程三里内外、七條を出でしは六時四十分、此處へ着きしは、八時半には及ばず、而も第一着。

此日寒きが、此處の寒さか知らねど、瓢の空になりては心先づ寒く、車を棄つると共に溪上の茶棚に倚り、うすしと譏りつ、數太白を引ききて暖を取る。知るや知らずや、此處は高尾の關門、酌みつ、ある亭下は清瀧川、其たと淙々と響けど水を見ず。前なる溪山青くして楓稀なるも、俯瞰すれば谷深く、楓樹は高く聳わて欄前に枝を伸べ、吾は錦雲の上に坐して杯を擧ぐるに異ならず。妙と謂ふべし。

若深き石徑を辿れば歩々楓多く、樹古く葉は紅に、碧溪の邊に出づれば、茶棚數多架せられ、八瀬女姿の婦とり、休ませ給へと勧む。三條大橋の模型とも云べき小橋打ち渡り石磴級々たる山徑に就く。少し登りて右に折れ、弘法大師硯石と云ふ巨石あり、竹柵にかこまる。位置は前に酌みし、紅葉茶屋と相對し、錦雲搖曳するほとり、酒旗の揚るを見る、景佳ならずとせず。進めばやがて、神護寺の山門、その二町餘の左右には、若樹なれども楓多く、皆紅葉して人迎へげなるが優し。

山門を潜れば地廣く、松疎に生じて紅楓點綴、鐘樓、藥師

◎時序

錦雲云々
谷の上の茶店
に酌むその形
容。

錦雲搖曳
紅葉を遠く眺
むる形容。

(秋) ○秋の旅 (三尾の秋)

九百四十三

尙往時云々
飾りの色は剥
げてはまた昔
の立派さが思
はるゝさの義

◎時序

(秋) ○秋の 旅 (三尾の秋) 九百四十四
堂、金堂、大師堂並び建ち、金碧の光り剥落したるも、尙往
時の莊嚴を偲ぶに足る。

當山は 光仁天皇の御宇、和氣清麿が草創せし所、當時は
神願寺と號せしとかや。 淳和帝の御宇天長二年、之を弘法
大師に賜ひ、神護國祖眞言寺と改めたり。 鐘樓は板倉勝重の
再建、釣鐘は本朝三絶の其一なり。

護王神社
別格官幣社に
して京都市上
京御所の西側
に在り。

護王神社は鐘樓の下なる古社、初め護法善神社と號し、寺
内の一社宇なりしも、 光明天皇改めて護王との號を賜ひ、
嘉永四年官幣に列せられ、明治十九年京都市に遷坐し、今は
舊址として尙、公の靈を祀れり。
鐘樓の左側より、右なる竹林を穿てば、和氣清麿公の墳墓

平野云々
廣き耕地が樹
の上すれすれ
に見ゆるさな
り。

千章云々
千本もの楓章
は大樹を數ふ
るに云ふ字。

◎時序

あり。 左して寺背の山の絶頂に登れば、性仁法親王の御陵あり。 地最も高く、東は京都附近の平野を樹梢に望み、西北には愛宕山聳ね、そが目八分通りに見ぬ。 稍高しと云ふべし。 此はごり楓なく、赤松多し。
高尾の高尾とも云ふべきは、地藏院址なり。 地は本堂より二町餘の西、さろく阪を降り、少しく登りて達す。 區域は稍廣く、小さき地藏院その傍の高處に在り、香烟盛んにあり。 縹緲たる白雲に和す。 院の崖下に小飛泉あり、文覺上人修法の遺蹟なるも、特筆に價する境には非ざりき。
院址の崖上には、茶棚相接し、酒肴を具して客を待つ。 見たるせば、千章の楓樹溪谷を蔽ひ、錦繡堆くして目もあや

(秋) ○秋の 旅 (三尾の秋)

◎時序

風趣
おもしろき。けしき。

秋色艶に
秋のけしきが美しきを云ふ

(秋) ○秋の 旅 (三尾の秋)

九百四十六

に遙かに其麓を繞る川は、瀬は白く淵は碧に、一しほの風趣を添へ、吾が筆には容易く寫しがたき眺め、酒よりは先づ景色に酔ひぬ。若し夫れ、其清き流れに添ひつ、兩岸の紅葉を賞して下らば、保津川と合する處に出づべく、別に谷越山越わての路もあるとにて、其合する處は所謂清瀧の落合、嵐山より五人掛の舟楫は、大堰川の勝探るべし。其處より上は、保津川より下る舟にてすべく、此は他日を期したり。尙、訪ふべきは槇尾と拇尾、再び今朝酔ひし紅葉茶屋の下に歸へり、路を左に取る。溪畔には楓樹まばらに、影は水流に映じて秋色艶に、山風吹きたるせば千片のにしき飛ぶ。少しく進めば、土橋架る。橋を左にし、右に進みて溪に沿ふ。對

石磴幾曲
石段の路がいくまがり。

造化殊更に
造物主がわざ

中興
中ごろに興す

◎時序

(秋) ○秋の 旅 (三尾の秋)

九百四十七

岸に老楓兩三株あり、綠樹しげれるの境、觀殊に美なりき。金銅ならぬ鐵の擬寶珠、俗と心に罵りつ、打ち渡る。苔蒸せる石磴幾曲、得しは槇尾山西明寺、堂塔たごそかに、古びたるも聊かにても荒れず、境靜にして苔厚く、人間一點の塵を留めず。只紅葉の名所に班しながら、一樹の楓の賞すべきなきを惜む。蓋し、造化殊更に別境を開き、遊人の目を新ならしむるもの乎。眼に入るの綠樹、紅葉に酔ひしを洗ふ足るよ。寺は平等心王院と號し、弘法大師の徒弟智泉法師の開基にして、中興を正忍律師とし、律宗にして眞言を奉ず。梅尾は四五町の上流に訪ふべし。槇尾を辭し、少しく登りて左折し、周山街道に出で、進めば、古雅なる白雲橋あり。

◎時序

古色云々
すべし趣が愛
すべしこの義

錦を着云々
紅葉の散る中
を行く形容な
り。

(秋) ○秋の 旅 (三尾の秋)

九百四十八

此處のは、眞の金鋼の擬寶珠、欄干は幾年の露霜に打たれて古色掬すべく、屈折したる溪の幽にして水の清けき、岩石の位置自ら其妙を得たる、高尾、檜尾の橋畔に見ざる所、しかも楓樹天を蔽ひ、此處ぞ初めて名所の實を擧げたる心地す橋渡らんとする右手に、關白鷹司兼平公墓所路との石標を得たり。心ならずも訪はざりき。

橋渡れば、路は山陰に沿うて爪先上り、溪畔には楓樹多く山風度る毎に紅葉千點又萬點、面を撲ちつ衣に點じつ、人は錦を着て書中を行くの感ぞする。本道をすて、左に登りて山門址に達す。一二の茶棚あり、就て憩ふ、其多からぬが嬉しく、繪書葉など買ふ。老婆の説明に曰く、榊尾は地たる明豁

明豁
土地打ち開け
てほがらかな
るこそ。

質したり
尋れたり云
ふ義。

列植
ならべ植うる
こと。

◎時序

(秋) ○秋の 旅 (三尾の秋)

九百四十九

にして紅楓多く、推して三尾の伯とすべし。さるを、一の寫眞なきは何ぞや。高山寺の上人、其境内の勝をして、玻璃鏡に上すを許さるに因るなり。高尾は然らず、故に斯の如く寫眞多し。高尾の橋に白雲とするは、漫りに此處の名をば取りけるなりと。實にや、白雲と題せらる、は榊尾の橋のみにて、他の二橋には題せられず。人々に聞きしかど、亦その名を知らざりき。此一事、殊更に歩を枉げて再びし、之を質したり。筆の都合により、此處にしるす。

進めば、左右に列植の樹は皆楓にして、若樹なれども葉といふ葉ごとに赤く、枝頭殆ど燃わんとす。歩を右にせず、直に杉の並木を過ぎ、石階五十餘級を拾うて登れば、寂びに寂

◎時序

荆棘云々
のどげやいばら
の中に埋もる
こと。

鎖鑰して
ちやうおろし
て。

閑寂比なし
静けさ此上な
しこの義。

(秋) ○秋 の 旅 (三尾の秋)

九百五十

びた金堂あり。左に進めば石水院址、荆棘に浸して訪ふ人稀なり。其下に佛足石あり、巨石に足跡を印したるもの、稱跡の長さ一尺七寸許、幅最も廣き處にして七寸許、尙も右すれば明惠上人の廟あり。小堂にして風打ち雨灌ぎ、其古びたる年を記しがたし。傍なる二基の墳墓は、千古の苔蒸して寂び深し。此處、鎖鑰して人を入れず。其下には、明惠上人の本堂あり、是も亦一字の古堂、ほとりは落葉しげく、青苔殆ど足の甲を没せんとす。
すたくと下れば、桐尾山高山寺、形式のみの寺なれども扉打ち透したる門内に石水院、相接して本坊あり。呼べど答ふるの僧なく、幽禽ひとつ鳴くなご、閑寂比なし。當山は、

◎時序

非凡
世の常ならぬ
こと。非常な
みはづれ。

衰殺
衰微して終に
除き去らる
こと。

眞言を奉じ、建永元年、明惠上人高辨の開基に係り、華嚴宗弘布の名刹なるも、華嚴後世に興らざるを以て遂に衰殺す。堂宇は中世廢れ、今存するものは舊規の一部分に過ぎず。石水院は即ち禪堂、後鳥羽上皇の賜ふ所にして、加茂石水院を移せるもの。現地には、明治年代、再び移せるにて、舊址は既に之を陳べたり。

明惠上人は、紀州の人、有田郡石垣本大字觀音寺の生れ、其誕生古蹟としては、八幡宮の側に存す。上人幼にして非凡その四歳の頃、父なる人戯れて烏帽子冠らせ、美しき男にして、御所へまゐらせんと云ひけるに、心に思へらく、法師にこそならんと思ふに、容貌の麗しきを望まじ。殊更に顔に傷

(秋) ○秋 の 旅 (三尾の秋)

九百五十一

◎時序

初念云々
僧にならんを
思ひし一念を
義ほしたるの

青女云々
秋の女神の樹
を紅葉にそめ
ふし美しさを云

◎時序 ○秋の旅 (三尾の秋)

九百五十二

つけ法師になされんと、縁よりて落ちて終に初念を遂げき。人之を見て、あやまちとぞ思へりしとなり。又、此寺に栖みける當時、茶の培養に力を致せり。上人は日本に於ける製茶の鼻祖、有名なる宇治の茶は、此地より移植せりと云ふ。寺門を出で、右すれば、前に金堂に行きし路に合すべく、余は塀に沿うて進み、一小平地に至る。此處に茶棚あり、酒肴を鬻ぐ。其下には楓多く、街道と川とを隔てし對岸には、千帳の錦繡張り列ねたるが如く、青女のすさび美しく、流る、水の清けき、配合最も宜し。やがて下りて街道に出で、川を右にして進む。溪上の樹と云ふ樹、枝ご云ふ枝、殆ど五彩に秋を飾り、眺めいと打ち開

◎時序

兵糧使ふ
食事をこころ
をこまひし語。

構造
作りかたのこ
ころ。結構。

殊に可なり
取分きてよろ
しとの義。

◎時序 ○秋の旅 (三尾の秋)

九百五十三

く。左は高山寺の側面、修竹の疎なるを補ふに、幾株かの老楓あり、趣殊に可なり。歩々地漸く開け、溪漸く廣く、樹は黄葉のもの多く、岩石また奇にして大なり。進みて三階家に憩ふ。三階家は、川の邊に建てられし旅舎、構造は三層にして眺望宜しく、他に家なければ溪山を獨占す。二階、三階には相酌むの客少なきも、勝手元にては、馬子も道者も旅人も、兵糧すべき重寶なる家なり。裏手の上流に烏帽子岩あり、孤松の秀でしを戴く、是れも柵尾の名所の一ぞや。街道を北する四町餘、夫婦橋架る。その附近には夫婦岩、鏡石、馬石、鞍石などの勝あり。明恵上人の袈裟掛松、惜しや十七八年前に

◎時序

斧斤の阨
伐らるゝこころ
な云ふ。

徘徊し
ぶら／＼して
この義。ゆき
つもごりつし

(秋) ○秋の 旅 (秋の嵐山)

九百五十四

斧斤の阨に遭ひ、今は名のみ残る。地は小平地、依然として巨岩あり。明恵上人廟所の上手を辿らば、其處へ往かるべく下りては此處なる三階家へ來らるべき由、旅舎の主云へり。やがて辭す。時刻は午下一點鐘なりき。歸るさには、秋色名残惜しくも白雲橋に徘徊し、見あげ見たるし、興仲々に盡まざりしを、今はと愛を割きて歸途急ぎ今朝高尾へ岐れたる路に合し、左なる舊道足にまかせて辿り幾度か上下なしつ、數多の人に先んじつ、後になりつして終に八幡社の前に來る。次は嵐山の秋なり。

秋の嵐山

小春
陰曆十月の異
稱。

渴を醫す
せむきをさごむ。

秋水磨鏡
秋の水の澄み
たるさまに云
ふ語。

◎時序

(秋) ○秋の 旅 (秋の嵐山)

九百五十五

午後は小春日和殊に暖かく、八幡宮の前より右して阪にさしか、る。今朝、左にして願みがちせし阪なり。道は廣けれど勾配甚だ急に、一汗せずば登り盡しがたく、自ら勇を鼓し其絶頂に達す。柿を賣る村翁あり、食うて渴を醫す。下るさは阪殊に急峻、且つ屈折多くして石車に乗り易し。中腹に來れば、眺望漸く東南に開け、青松しげる岡秀麗、忽ち湖波の光り樹梢に逗る。是ぞ大澤池と廣澤池、共に洛西の名所なり其相距る五町許、秋水磨鏡の如く、遙かに青山の影の映するを見る。

大澤池は、もと嵯峨帝の離宮内に屬し、奇石多かりしと云ふも、のち閑院の内裡に移されて今は無し。菊島は、池上

◎時序

巨勢金岡
書の名人なり

昇霞
おかくれにな
るこそ即ち崩
御。

寶閣
寶の字は敬稱
おてら。

(秋) ○秋

の 旅 (秋の嵐山)

九百五十六

の一洲嶼、その西北隅の池中に庭湖石あり。峙立する巨岩の稱にして、巨勢金岡が建てしものと傳へ、山家集には西行法師の和歌あり。

池の北畔には大覺寺あり、もと嵯峨天皇の離宮にして嵯峨院と稱したり。天皇の昇霞あらせられて後、階庭掃はず、亭臺荒れしを、淳和天皇修して寺とし、その第二皇子恒寂法親王をして寺基を開かしめ、代々法親王の住せらる、所となりぬ。宗旨は眞言、後宇多天皇中興し給ひ、法燈重光せしも、今は當時の規模は半をも存せずとするも、尙洛西巨利の一に算せられ、老松亭々として寶閣を護し、幽雅擧げて題すべからず。もとは門前の松林中に萩多く、西風吹きそむる

◎時序

全盛時代
さかんなりし
ころ。

老蛩
秋のくれに鳴
くきりきりき
す。

(秋)

○秋の 旅

(秋の嵐山)

九百五十七

頃には、嵯峨野の秋を專にせし由なるも、是も亦僅かに幾叢かを餘すのみ。花は今既になく、老蛩空しく晝を鳴く。廣澤池は周回約十二町、昔寛朝僧正の開鑿する所、古來觀月に名高く、星の影稀なる晴夜最も宜し。又、堤の柳、花燕子花、萩、雁、鴨などを景品とし、之を詠まれし和歌甚だ多し。對岸を遍照寺山と稱し、寛朝登天の松、坐禪石、兒石などあり。遍照寺の舊蹟は、池の西北に訪ふべく寛朝僧正の開基せし所たり。尙聞くが如くは、觀音島は遍照寺全盛時代、寺より橋を架して觀音堂に通ず、故に名を存すとたり。大道法師足形の池は、東南三町餘の處、屏風岩は、鳴瀧に出づる道路の北に峙ち、音頭山は足形池の東に聳ゆるもの。山

◎時序

誤りて
そそうしてけ
がで。

亂松云々
幾本本ももな
き松が青々た
るを云ふ。

粉壁點々
白壁が處々に
見ゆるを云ふ

(秋) ○秋の 旅 (秋の嵐山)

九百五十八

中には草樹茂り、處々に井戸あり。不案内の者安りに山に入るときは、誤りて之に陥るいと多しとかや。名づけて千壺の井と云うといふ。落ちなんとする日、嵐山の秋に心せよ、一々訪ふに違なかりき。

やがて耕地の間に出づ。路廣く迷ひもやらず。歩を回して北を望めば、亂松みどり濃く、半ば暮烟むらさきに棚引き、宛然たる書景、西なる山は、嵯峨帝の御陵地、少しく低うして東に連なるは、後宇多帝の御陵地、今し下り來し道の右手の山なり。更に遙かに東南を望めば、一帯の山に粉壁點々として、暮色にぼかさる。京の東山かと思へば、然に非ず。稻束肩にし、銜へ烟管して來し野人に問へば、彼處は伏見の兵

◎時序

所以
わけ。理由。

素樸の風
飾りけなく正
直の風俗。

山門
お寺もん。

(秋)

○秋の 旅 (秋の嵐山)

九百五十九

營なりと答ふ。彼の阪はと重ねて問へば、今し君が越させられしは長刀越、名の起る所以は知らず。それよ其阪開鑿の折黄金入の壺三個を發見したり。眞とし給はざらんも、現に警察署に保管しありと言ひ添ゆ。疑はれまじとの用心なり、素樸の風はの見て床し。又、廣澤池の左の山を指して曰く、彼處は僧正遍照の遺蹟、池水を隔て、林樹の蒼鬱たる處は兒の森なりと教へ終り、女乙のすがた暫しとゞめんの一首を口すさみ、さらばと去りぬ。

大覺寺を右に見、進めばやがて大道通じ、人家相接して市街のさまを成す。西して山門を得、五臺山清涼寺にして俗に嵯峨の釋迦堂と呼ぶは是。本尊の釋迦如來は、世に赤梅檀の

◎時序

永延
一條天皇の御

脇士
脇立さも云ふ
佛像の左右に
侍し居るもの

風韻云々
おもむきが深
きを云ふ

(秋)

○秋の旅

(秋の嵐山)

九百六十

釋迦と稱し、海内無二の靈像、毘首羯磨天の作、永延年間大和東大寺の僧齋然宋に遊びて得たるものと傳へらる。本堂の東に一堂あり。栖霞寺と號す。本尊は阿彌陀佛、觀音勢至の二菩薩を脇士とす。聞く、此地も亦嵯峨天皇離宮の域内に屬し、大覺寺と相通じたるも同帝の第十子融公、此に山莊を設けて栖霞館と稱し、のち捨て、精舎とせりと。時すでに暮色蒼然、誦經の聲四方に起り、疎鐘吾を西の門に送る。直に進めば愛宕山路、之を避けて左に折る。小楠公首塚あり、柵内半町餘の奥に弔ふ。その左右は萬竿の修竹にして、丹楓處々に點じ、風韻限りなく、中央にしける石の外、碧苔雲よりも深く、岑寂の氣人の衣を撲つ。

◎時序

野の宮祇園
天照大神を祭
る古伊勢の
齋宮に移住し
給ふべき内親
王其移住前潔
齋し給ひし處

あざやか
鮮明はツキ

(秋)

○秋の旅

(秋の嵐山)

九百六十一

やがて再び釋迦堂の山門の下に出づ。廣き路を下れば終に渡月橋畔に出づべく、中途には野の宮祇園、二尊院常寂光寺、さては其處に定家の舊蹟小倉山莊、續いて最も有名なる天龍寺、みな訪ひ漏しぬ。外に心残れるは祇王寺、相隣りての三寶寺なりしよ。前者は平相國の愛妾たりし祇王、祇女、止知、佛等の遁世したる舊蹟、今に佛殿には四女の尼像を安置するとかや。後者は瀧口入道と侍姫横笛との舊蹟、訪ひなば、秋の憐れいと、深く感ずべかりしを、是も亦漏しぬ。渡月橋畔に立ち眺むれば、龜の伏したるに似し嵐山、日既に沈みしも尙暮れやらず、黄葉紅葉谷また谷、秋の色あざやかなり。進みて欄に倚れば、瀬聲淙とひびき高く、上流なる

◎時序

淡烟搖曳
うす煙が棚引くこと。

山紫に水明
夕暮のけしきを云ひし語。山水明媚の義。さするは非なり。

(秋) ○秋 の 旅 (秋の嵐山)

九百六十二

大悲閣の下まで双眸に收められ、淡烟搖曳す。一二の川舟往來す、書中の景なり。

歩を返せば暮色いよ／＼濃く。山むらさきに水明かに、峰の尾や谷の紅葉は、心ありて吾がために暮れぬに似たり。川の右には酒閣茶棚、秋を賞するの客を留め、往來の遊人漸く稀に、櫻咲く頃に比すれば、流石に静けし。時少し早くば橋越えて山裾を辿り、大悲閣へ詣つべかりしを、今は及ばずと舟を八賞軒の下に買ひぬ。

清く水澄みし大堰川、黄昏のけしきを一棹にし、殘瓢を傾けつ、上流に沂る。右の小松原は遊園地、丹楓處々に點綴す左は即ち嵐山、峰となく谷となく、錦繡の彩尙辨すべく、

◎時序

篆徑云々
うね／＼したる小路があること。

香雲艶雪
櫻花の形容。

紺碧云々
黒ばみて青きを云ふ。

(秋) ○秋 の 旅 (秋の嵐山)

九百六十三

殊に床し。暮の蒼崖一しは黒きも、一丈ばかり白う懸る戸無瀬瀑、次に得しは千鳥淵水深うして、紺碧湛へ、松にまどひし蔦紅葉、さては枝さし伸べし楓、影を波心に點す。其上方は即ち櫻谷、春ならば香雲艶雪に埋められんも、今は葉の黄になれるが堆を成し、黒きは松、白きは雲のみ。少し右に廻れば、右なりし遊園地盡きて崖高く、左は樹密に紅葉稀に、彼の渡月橋よりして山裾辿り、夕暮の秋探り來る遊人の語、淋しさを破りて手に取る如し。

川に巨岩あり、牛岩と呼ぶ。其形によりて名を得たらんも能くは似ず。舟はやがて鑛泉場の下に達す。上陸すれば篆徑斜に通じ、茶店の傍に芭蕉翁の『花の山二町上れば大悲閣』